東京工科大学報 62

Contents

1　学長メッセージ
2　TUT TOPICS
2 ― 5　学部・学環・研究科便り
6 ― 13　学生・教員の受賞と活動
　応用生物学部
　コンピュータサイエンス学部
　メディア学部
　工学部
　デザイン学部
　バイオ・情報メディア研究科
13 ― 15　TUT Information
　人事（採用、任命、昇任、退職）
　訃報
15 ― 18　外部研究費関連
　（受託研究、科学研究費補助金等）
18　大学事務局便り
19　学事
　平成 26 年度学部卒業者・大学院修了者数
　平成 26 年度就職状況
　博士学位授与、平成 27 年度入学者数
20　その他
　2016 年入学者選抜日程表
21　平成 26 年度決算、平成 27 年度予算
22　平成 27 年度学内行事予定（7 月～ 12 月）
23　入学式によせて（学長式辞）
24　編集後記

学長メッセージ　「理工系総合大学へ」

皆様、こんにちは。学長の軽部です。今回は本学についてお話したいと思います。

本学は 6 学部と教養学環・大学院をもつ総合大学に発展しました。八王子キャンパスにはメディア学部、コンピュータサイエンス学部、応用生物学部、工学部と大学院を設置しています。メディア学部は文理融合を謳っていますが、文部科学省への届出は理工系の学部です。一方、蒲田キャンパスの医療保健学部は医療系ですが、臨床工学科や臨床検査学科は理工系の学科です。デザイン学部は平成 26 年度から工業デザインコースを設置しているので、このコースは理工学系コースと認めることができます。このように考えると、本学の 6 学部は理工系の学部と言えます。これらの 6 学部はそれぞれ教育研究の目的を持って編成されています。メディア学部は社会や生活をメディア技術で豊かにする、コンピュータサイエンス学部は ICT で社会や産業に貢献する、応用生物学部は生命科学や生命工学でわたしたちの生活の質を向上させる、工学部は省エネルギー、省資源で環境に負荷を与えないサステイナブル工学で産業を発展させる、デザイン学部は実践的なデザインで社会や産業に貢献する、医療保健学部は医療や保健技術を活用してわたしたちの健康と生活の質の向上に寄与する、これら 6 学部の共通の設置の目的は、サステイナブル社会への貢献と定めました。

20 世紀は科学技術が著しく発展した世紀でもありました。わが国は資源があまりない国ですが、物作りは得意な国民がおり、アジア諸国の中では唯一先進国の仲間入りを果たしました。原料を輸入し、大量生産によって安価で高品質な製品を作り、海外に輸出して経済発展をしてきました。このおかげでわたしたちの生活の質は著しく向上したのです。しかし、産業の発展によって環境問題が起こったことも事実です。

21 世紀は 20 世紀のような著しい発展は望めません。世界の人口は 100 億に近づき、食糧、資源やエネルギーの限界が近づいています。そこで提案されているのが持続可能な社会（サステイナブル社会）です。

本学は理工系の総合大学としてこのサステイナブル社会の実現に貢献していきたいと考えています。

医療保健学部理学療法学科がリハビリテーション教育評価機構に認定される

認定証

東京工科大学　殿

貴施設　医療保健学部理学療法学科は、本機構の定めたリハビリテーション教育に必要な施設基準およびカリキュラムを提供、実施できる養成施設として認められましたので、ここに認定いたします。

【有効期間】
2015年4月1日～2020年3月31日

2015年3月30日
一般社団法人　リハビリテーション教育評価機構
理事長　才藤　栄一

平成27年3月30日付で、一般社団法人リハビリテーション教育評価機構より、本学医療保健学部理学療法学科がリハビリテーション教育に必要なカリキュラムを提供・実施し、施設基準など全ての評価基準を満たしているとして、認定されました。

一般社団法人リハビリテーション教育評価機構は、リハビリテーション教育の質の向上と発展充実のために活動し、リハビリテーション関連職種の教育・養成の振興に貢献することを目的とする団体です。本学は「FD（大学の授業改革のための組織的な取り組み方法）などによる教育・研究のスキルアップを全教員で取り組むなど、教育の質の向上に積極的に努めている」という点が特に優れていると評価されました。

理学療法学科のほか、医療保健学部作業療法学科も平成26年3月28日付で同機構からの認定を受けています。

軽部征夫学長が特許庁長官表彰（知的財産権制度関係功労者表彰）を受賞

軽部征夫学長が、特許庁の平成27年度「知財功労賞」において、特許庁長官表彰「知的財産権制度関係功労者表彰」を受賞しました。表彰式は、平成27年4月17日（金）に東海大学校友会館（東京都千代田区）で開催されました。

受賞理由：

日本知財学会の初代会長を務め、知的財産権制度についての積極的な政策提言活動の基盤作りに尽力。さらに、自らの中韓との人脈をいかしてアジア諸国との知的財産に関する国際学術交流を積極的に進め、韓国産業財産権法学会（現・韓国知識財産学会）及び中国知識産権研究会と日本知財学会との日中韓提携に尽力し、日本とアジアの知的財産権制度と学術の発展に貢献。

大学の知的財産管理の草分け的存在となった東京大学TLOの設立を主導。さらに、全国の大学のTLO事業の振興と情報交換のために、大学技術移転協議会を設立するなど、全国の大学における知的財産管理の向上及び技術移転の促進に貢献。

安間総介名誉教授が国際基督教大学（ICU）同窓会からDAY賞を受賞

平成27年3月28日に国際基督教大学(ICU)同窓会から安間総介名誉教授がDAY賞(Distinguish Alumni of the Year= 卓越した卒業生2015）を授与されました。この賞はテレビ放送開始と同時に開校したICUの卒業生（約2万名余）を対象に与えられるものです。

今まで、宇宙飛行士、芥川賞・直木賞受賞者、ソニー・富士ゼロックスの社長、「釣りバカ日誌」の映画監督など有名人が受賞し、安間総介名誉教授は5期生では初めてで、70人目の受賞です。

安間先生の受賞理由の1つに「国際的な人材育成」があり、東京工科大学メディア学部の専任教授の時に企画・司会した「日米ハイビジョン・プロデューサー・セミナー」があり、日本側の主催者は東京工科大学メディア学部でした。アメリカのポートランドで平成12年5月に実施したこのセミナーに、日本側からNHK、NHK関連制作会社、テレビマンユニオン、ドキュメンタリージャパン、アメリカ側からロサンゼルス、ポートランド、ディスカバリーなどのテレビ局、制作会社のハイビジョン・プロデューサー15名が参加し、ハイビジョン番組の日米共同制作時の問題点を検証しました。

学部・学環・研究科便り

工学部

『第1回サステイナブル工学研究会を開催』

平成27年4月に353名の学生が入学し、工学部が新たなスタートを切りました。持続可能な社会（サステイナブル社会）の実現に貢献する「サステイナブル工学」の教育・研究や、独自の産学連携「コーオプ教育」を取り入れ、特徴ある教育を目指します。サステイナブル工学は、我々が暮す地球の「環境」、経済が活性化する「産業」、豊かな社会で生きる「人間」を横断的にとらえ、持続可能社会を実現する学問です。幅広い視点で「ものづくり」全体をとらえ、持続可能な社会づくりに役立つさまざまな技術を実現します。

先端的かつ実践的なサステイナブル工学の教育・研究を、機械工学科、電気電子工学科、応用化学科の3学科が合同で行っています。その一環として、6月3日に第1回サステイナブル工学研究会を開催し、機械振興協会副会長・技術研究所長で、本学客員教授の足立芳寛先生にご講演を頂きました。足立先生は、鉱物資源を中心とした地球環境問題を専門とされており、「マテリアル環境工学」など多くの著書を執筆されています。研究会では『サステイナブル社会をめぐる過去・現在・未来』という題目で、国連のブルントラント委員会が1987年に発表し

た報告書でサステイナブルが統一的に定義されたことや、温暖化を中心に地球環境問題の現状を解説していただきました。また、将来に向け、資源生産性を最適化する①社会制度、②製品設計、③再利用技術のご提案もいただきました。当日は、工学部を中心に約 60 人の参加があり、講演後に開催された懇談会でも、足立先生を囲んで熱い議論が展開されました。

研究会での議論を反映させ、サステイナブル工学のテキストをまとめています。今後、2ヶ月に1回のペースで研究会を開催して議論を重ね、平成 28 年 4 月から「サステイナブル工学基礎」を開講します。

『3学科合同でのポスター発表会を開催』

1年次科目として「フレッシャーズゼミ（FS）」が開講されています。この科目は、大学生活全般に必要となる環境への適応や仲間づくり、さらに社会人として求められる能力を養うことを目標としています。日本語スキルアップカリキュラムやグループワークなどを通じて、各学科の教育・研究の全体像を把握し、個人またはグループとして活動する能力を身につけます。工学部では、FS の7回分を利用して、各学科のカリキュラムや研究内容などを調査し、ポスター発表を行うテーマを導入しました。7月1日の４、５限を利用して、合同のポスター発表会が片柳研究所棟１階ロビーで開催されました（ポスター総数８８件）。学生たちは３～５人のグループに分かれ、テーマを決めて教員への取材と文献・インターネットによる調査を行ない、これらの結果を A1 サイズのポスターにまとめ、相互に説明・討論する発表会を行いました。所属学科のポスターだけでなく、他学科のポスターも見て議論を行うことにより、異なる分野を学ぶとともに、他学科の学生と仲良く話す機会となりました。参加者は内容、デザイン、ユニークさなどの評価を行い、後日、最優秀ポスター賞、各学科での優秀賞、ベストデザイン賞、ユニーク賞を表彰することになっています。

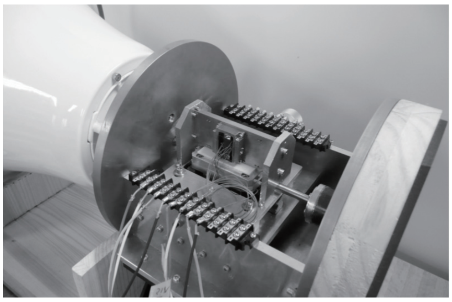
◆ 応用生物学部　『来年度から「生命科学・環境コース」と「医薬品コース」を加えた新コース体制へ』

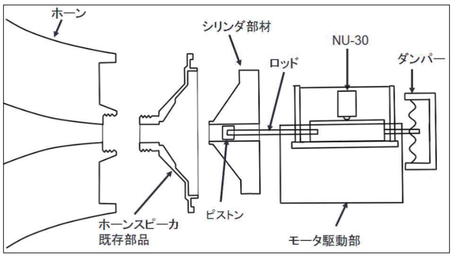
応用生物学部の学びの目的である「バイオテクノロジーに関する基礎知識と専門的な知識・技術を修得し、それらを人や社会、環境、産業のために幅広く役立てる人材を育成する」ということ自体は、これまでと変わりありません。その中で社会や学生が求める学びや環境に応じて、今まで以上に教育体制を強化・充実させようと、コース再編を実施します。

具体的には、本学部では生物と化学を学んだうえで、２年生の終わりまでにひとつの応用分野を選ぶというカリキュラムになっていますが、来年度の新入生からは「生命科学･環境」「医薬品」「先端食品」「先端化粧品」の４つの領域から選択できるようになります。この内、「生命科学・環境」と「医薬品」の２コースは、来年度から新設されるものです。「生命科学・環境コース」は、従来のバイオテクノロジーコースと環境生物コースに共通する学びが多かったことから、それらをひとつのコースに統合し、コース内で生命科学分野、環境分野の２分野に分けて学べるようにしたものです。生物が持つ優れた機能を応用して、医療や環境保全に役立つ知識や技術を学んでいきます。「医薬品コース」は、これまでバイオテクノロジー分野を専攻した学生の就職先に医薬品関係の会社が多いことから、それを独立したコースで専門的に学べるように新設します。主にタンパク質や核酸医薬品などの生物創薬について学びます。

◆ コンピュータサイエンス学部　『CS 学部の目指すもの』

コンピュータサイエンス学部では、先進性と多様性を重要視していますが、それ以上に、「で、それ何の役に立つの？」という問いを大切にしています。個々の技術に潜む本当の価値を見出し育てているのです。例えば、大石研究室。防災用途を意識したスピーカの研究・開発をコンピュータサイエンスの観点から行っており、その成果はこの春開催された日本音響学会春季研究発表会にて高く評価され、研究発表者の長岡大地君（大学院生）は学生優秀発表賞を獲得しました。また、手塚研究室では、いままさに社会を大きく変えようとしているマイナンバー制度に関する研究を黎明期から手がけており、手塚先生自身も特定個人保護委員会（内閣府下組織）の委員としてその普及に携わっています。手塚研の学生たちは先生の姿を見て、コンピュータサイエンスという学問の社会的意義を身に染みて感じながら、新しい社会の実現へ向けて日々勉学・研究に取り組んでいます。さらには、亀田・渡邊研究室ではコンピュータサイエンスの立場から、統合失調症患者さんのための認知リハビリテーション（就業支援）用ゲームソフトウェアの研究・開発に関わっており、この７月には全国 37 の医療機関に公開する運びとなりました。本来娯楽のためのゲームが、実学主義の立場で研究・開発すると医療の現場でも広く役立つものになる、これこそが、本学本学部が他大学の同系統の追随を許さないまさに実学主義の真骨頂であり、ＣＳ学部が目指すものです。今日もまた先進技術を創造しつつ、技術に新たな価値を創造・付加し続けています。

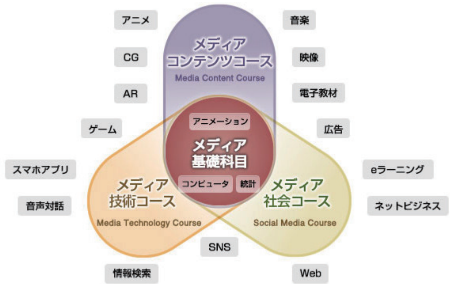




メディア学部　『メディアについて学び研究するための 3 つの要素』

　メディア学の教育研究機関として日本で初めて設置されたメディア学部は社会のニーズに応えながら進化発展を続けており、学報 61 号での計画報告通り、平成 27 年 4 月に生まれ変わりました。

新３コースと関連メディア分野



　今回の改革の背景は、図にも示すようにメディアについて学び研究するためには 3 つの要素が特に重要であるとの判断にあります。

1. メディア情報である映像や音などのコンテンツの学び
2. その情報を人や社会に幅広く伝える方法の学び
3. メディアにより豊かな生活をもたらす技術の学び

　これまで以上に学ぶ意欲の高い若者に入学して欲しいという期待を抱き、今回の改革と同時に入試科目を増やしたにもかかわらず偏差値ランキングを向上させることができました。この理由として、これまでの情報発信に加え、毎日新しい記事を掲載し続けている公式ブログの効果もあげられます。
　希望を持って入学した学生にとって大学での学びを充実させるためには基礎力の強化は欠かせません。このことを踏まえ、実学を重視したメディア基礎科目の演習も一新し、1 年次授業も順調にスタートしました。入学者はまずは、全員がメディアに関する基礎力を確実に身につけます。その上で、特に関心の高いコースを選択し、専門的知識や技術を学び、卒業研究を選択することが出来ます。こうした学びの流れをつくることで、例えば特に映像制作に強い興味を持って入学した学生であれば、コンピュータグラフィックス、音響、ネットなど各種の知識と技術も必要になるため、その学生は映像について学びながら同時に関連分野も学ぶことになります。若者に人気のゲームを学ぶ場合などでも同じです。ゲームに関連し、アニメ、音楽、デザイン、アプリプログラミングなども同時に学ぶことになります。本学におけるラーニングアウトカム（学習効果）の明確化に合わせ、新カリキュラムでは論理的思考力の強化のため、プログラミングを必須にしました。
　メディア学部の特長とも言える入学生の興味対象の広さに応えるためには、それに応じたカリキュラムを提供することが大事です。自由度が高く、かつ、専門性も向上させることが出来る今回の新カリキュラムは、個々の学生の意欲・希望に応じた学びを可能とし、将来の進路開拓にも役立つと期待しています。

教養学環

『キャリアデザインⅠ，Ⅱ』

　『キャリアデザインⅠ，Ⅱ』は、問題発見・解決力、コミュニケーション力、プレゼン力等の社会人として必要な基本能力を養成することを目標にした 2 年次必修科目（工学部、医療保健学部除く）です。少人数グループで､自ら発見･設定した社会問題の解決案を見つけるため、協同で調査・分析を行います。その成果は口頭発表し報告書にまとめます。とくに後期のⅡは業界・企業研究をテーマとし、進路選択への意識を高め、自らのキャリアをデザインするきっかけになることもめざしています。平成 26 年度は、企業コンサルタントの方々のアドバイスを適宜受けながら、八王子市や多摩信用金庫との連携のもと、多くの学生が実際に地元中小企業を訪問し、インタビューや施設見学を行いました。最終発表には調査対象の企業の方々の参加もありました。外部の方々との交流や企業訪問などを通して､たんなる座学では得られない「現場」体験によって、キャリアデザインの動機づけのよい機会になったことでしょう。

京成テクノス株式会社、臼井社長のレクチャーを受ける学生達

『海外研修』

　教養学環では、平成 25 年度より『海外研修』を実施しています。平成 25 年度、26 年度とも、米国ロサンゼルスにて研修を行いました（27 年度も同じプログラムで 9 月に実施します）。多様な民族が入り混じる米国の文化社会に直接触れ、その異文化体験を将来に活かすことが目的です。
　個人の旅行や語学研修と違い、大学主催の授業として行っているため、初めての海外経験としても安心でき、短い期間ながら語学に特化しない幅広い体験が可能になっています。また米国の歴史や文化などを事前に学び、深い実体験のための知的準備をした上での研修になります。南カリフォルニア大学ではワインバーグ教授の講演を聴き、ディズニーの教育プログラムにもチャレンジしました。

ワインバーグ先生を囲んで集合写真

オプショナルでのグランドキャニオン風景

ディズニー教育プログラム体験の様子

医療保健学部　『平成 26 年度医療保健学部国家試験合格率について』

　医療保健学部の平成 27 年 3 月卒業者の国家試験合格率は右表のとおりです。
　看護学科は、受験者全員が合格しました（合格率１００%）。また、全ての学科で合格率が全国平均を上回っており、高い合格実績や評価が得られたものと考えております。このような結果が得られた背景には学生本人の努力だけでなく、関係者やご家族のあたたかいご支援、ご協力があってのことと感謝申し上げます。
　本学部における教育の成果としての合格率は、保護者及び関係者からも高い関心が寄せら

国家資格	学　科	受験者数	合格者数	合格率	全国平均 *
看護師	看護学科	76 名	76 名	100%	90.0%
保健師		21 名	21 名	100%	99.4%
理学療法士	理学療法学科	76 名	72 名	94.7%	82.7%
作業療法士	作業療法学科	32 名	27 名	84.4%	77.5%
臨床工学技士	臨床工学科	66 名	64 名	97.0%	83.2%

＊新卒・既卒の全国平均

れています。医療人を育成する教育現場としての社会的責任を果たすため、今後とも継続的な合格率の高さを維持していく所存です。

特に臨床工学科は昨年度（第 1 期生）の合格率 71% から 97% へと大きく向上しました。これは、国家試験対策講座を継続的に実施し、また臨床工学科では卒業論文審査会を約 2 週間前倒ししたことで合格率の向上に貢献することができました。国家試験前の約 3 ヶ月間、学生と教員が目標を達成すべく一丸となり、豊かで密接な人間関係を構築できたことが受験生に安心と自信をもたらしたものと考えています。

これらの合格率は本学部で教育を受けた学生が必要な学識や応用能力を有するかどうかが判定され一定基準を満たしていたことが示されたにすぎず、教育力など「大学や学部の実力」を示しているものではありません。国家試験を受験するまでの 4 年間の学修においてどのような取り組みが求められているのかに関して、引き続き教員研修会などで議論しております。これには個々の学生の到達度を把握した上で、各学生に最適な教育を実現できる教育環境を早期に整える必要があると考えています。

近年、受身の授業形態に慣れたまま大学に入学し、自由な学風での教育環境に馴れない学生が目立っています。これらの学生に多く見られる事例として、授業時間以外での学修習慣の欠如が如実に表れています。

このような時代背景のなかで本学部ではアクティブ・ラーニング（課題を与えるなど）を積極的に導入し、学修する習慣が身についていない学生の到達度を評価し、個々の学生に対する学修を支援したことが結果に（合格率に）反映されたものと考えています。

高い国家試験合格率を維持するために、大学において国試対策講座が主体となるような教育システムを導入したとなれば、大学の専門学校化又は予備校化しているとのご批判を受けるかと思います。

そういったご指摘に対して本学部では各学科の特徴が出せるよう配慮しながら新カリキュラムを導入して対処していけるよう現在作業を進めています。新カリキュラムの導入にあたり、学生生活初期に早期体験学修（Early Exposure）として目的意識を喚起する授業を取り入れ、4 年生までモチベーションを維持できるよう工夫しています。また、1 年生から積極的にアクティブ・ラーニングを導入し、個々の学生の到達度を確認できる体制が取り入れられるよう心がけています。

現在、実習施設などとも協議を重ね、必要な学修方法の種類と手順を示した上で目標に到達するための具体的な『学修方略 (Learning Strategy)』を検討しています。すなわち、1 ～ 4 年生にかけて段階的に学修時間を増やせるよう教育内容や教育時間、学修方法が適しているかなどを評価しております。

このように学修方略の再考によって、国家試験対策授業を単に増やすことによる大学の専門学校化、予備校化を抑止できる重要な課題を解決できるものと考えています。

現在、本学部を中心として大学の社会・地域に貢献する活動として、医療現場で求められている医療技術・医療機器・器具類発展のための活動を開始しております。医療人を養成する本学部において超高齢社会の中で求められる医療手技・医療技術・医療機器の発展の一助を担う活動は大学ならではの発想が求められ、本学部で学ぶ学生にとっても刺激になるものと考えています。本学部の活動をご理解頂き、支えていただけるステークホルダーからのご支援をどうぞ宜しくお願いいたします。

上述したように、本学部では学修方略の検討を進めております。次年度以降の国試に対しても万全の対策で望む所存です。また、学生が学修習慣を身につけることこそ唯一確実な国家試験合格への道となります。どうか今後とも保護者の皆様からのご支援、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

◆ デザイン学部　『「デザイン開発プロジェクト」、はじまる。』

昨年度にスタートした「デザイン開発プロジェクト」は、デザイン学部の教員が中心となり、産学連携と地域連携をひとつにした社会連携の活動として、テーマの設定を進めてきました。これまでの議論を経て、広く人々が関心を持つテーマの中から「災害時避難用品のシステム開発」としました。これは災害時避難のための収納バッグと、その中に入れる避難用品のデザインを総合的に開発するものです。避難用品は個々に開発されることが多く、持ち運ぶためのものはあまりありません。今回の開発は個々の商品開発はもちろんのこと、収納を考慮した持ち運びバッグと、それが避難先でのプライバシーを守るカーテンやテントなどに早変わりするものを、一つのセットとして開発します。

開発に際しては、デザイン学部の所在地である蒲田という「ものづくりの街」の特徴を生かし、出されたアイデアを地元の企業と連携して試作するなど、活動を通してより地域との関係を密にして進めていきます。

◆ バイオ・情報メディア研究科　『学士・修士一貫早期修了プログラムについて』

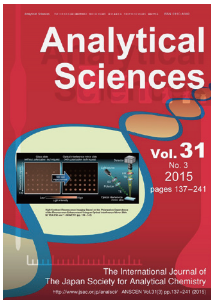
本学大学院バイオ・情報メディア研究科では、主に八王子キャンパスで学ぶ学生を対象に、2014 年度新入生から、学部を 3.5 年で卒業＋大学院を 1.5 年で修了を目指す、学士・修士一貫早期修了プログラムを開始しました。

通常、大学院の博士前期 (修士) 課程まで修了するには、学部が 4 年＋大学院が 2 年の合計 6 年かかります。しかし、このプログラムでは、各学部における優秀で意欲のある学生を対象に、学部を 3.5 年で卒業し、その後大学院の博士前期 (修士) 課程を 1.5 年で修了することで合計 5 年で「学士」と「修士」両方の学位を取得することができます。

また、本学大学院では、大学院入学金（通常 25 万円）の免除をはじめ、年額最大 30 万円の給付制奨学金や学部の成績と一定の家計基準に基づき、大学院授業料の年額 25% を減免する授業料減免制度を設けています。この他、学部の実験や演習科目で教育補助活動を行い、給与を得る TA(ティーチング・アシスタント) 制度も設けているなど、本学大学院では、熱意ある学生を支援する制度を数多く用意しています。基準等、詳しくはアドバイザー教員または事務局八王子キャンパス学務課大学院係までお問い合わせください。

応用生物学部

秋元卓央准教授らの論文が論文賞「Hot Article Award Analytical Sciences」を受賞



秋元卓央応用生物学部准教授と安田充博士関西学院大学研究員 (平成 24 年度に本学で博士号を取得) の論文が、日本分析化学会が発行している国際誌「Analytical Sciences」の 31 巻 3 号で表紙を飾るとともに、論文賞「Hot Article Award Analytical Sciences」を受賞しました。また、注目論文として Analytical Sciences のホームページで紹介され、和文論文誌「分析化学」にも要旨が掲載されます。

雑誌名：Analytical Sciences (Vol.31, Num.3, 2015)
論文題目：High-Contrast Fluorescence Imaging Based on the Polarization Dependence of the Fluorescence Enhancement Using an Optical Interference Mirror Slide
著者：Mitsuru Yasuda and Takuo Akimoto

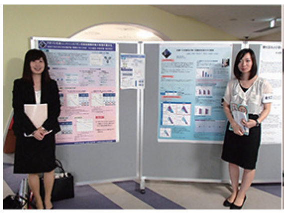
「先端化粧品科学シンポジウム – 美肌と化粧品 –」開催のご案内

本学では、応用生物学部に国内初の先端化粧品コースを設立し、「皮膚・毛髪と化粧品」に関する、研究及び教育・人材開発の活動をおこなっており、本コースの活動成果の化粧品業界への還元と最新化粧品技術に関する情報交換を目的に、先端化粧品科学シンポジウム（第 5 回化粧品セミナー）を開催いたします。

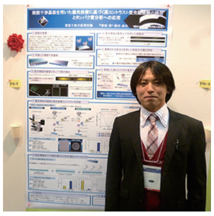
本年のシンポジウムでは、池田敏秀氏 (元資生堂執行役員、（株）肌箋舎代表) をお招きして最近の化粧品のマーケット動向についてのご講演をはじめ、花王（株）メイクアップ研究所の中尾啓輔氏による年齢印象解析に基づいたパウダーファンデーションの開発についてのご講演、本学教員による皮膚・毛髪に関する基礎研究・開発研究についての講演ならびに本学学生による研究成果のポスター発表を懇親会形式で企画しております。

つきましては、化粧品関連の企業・団体の皆様に、是非とも本シンポジウムにご参加いただきたく、ご案内申し上げます。

■開催日：平成 27 年 8 月 24 日 (月)　13:30 ～ 18:00
■場所：東京工科大学蒲田キャンパス 3 号館
■参加費：無料
■対象：研究開発・技術部門・商品企画・採用のご担当者
■定員：90 名
　　（申込者が定員に達した場合、先着順とさせていただきます。）
■アクセス：ＪＲ京浜東北線・東急池上線・東急多摩川線「蒲田」駅
　　蒲田駅西口より徒歩 2 分
■本セミナー全般に関する問い合わせ先
東京工科大学 応用生物学部　岩渕 徳郎
Tel. 042-637-2783
E-mail. iwabuchitkr@stf.teu.ac.jp



秋元卓央准教授らのグループが PosterAward を受賞



平成 27 年 3 月 11 日 (水) ～ 14 日 (土) に開催された第 62 回 応用物理学会春季学術講演会において、安田充博士研究員 (平成 24 年度バイオニクス専攻博士課程で学位を取得、指導教員：秋元卓央) と秋元卓央准教授が Poster Award を受賞しました。

発表者：安田充，秋元卓央
発表題目：薄膜干渉基板を用いた偏光技術に基づく高コントラスト蛍光顕微鏡の開発とタンパク質分析への応用

国際バイオテクノロジー展（BIO tech 2015）に出展

世界中のライフサイエンス研究機器メーカーや試薬メーカー、バイオベンチャー、研究機関、国・自治体が、先端バイオ技術を一堂に出展し、製品・技術の導入を目的に来場する研究者と出展社との間で、技術相談や商談が活発に行われるアジア最大のバイオ展／国際会議である、「国際バイオテクノロジー展 (BIO tech 2015)」が、平成 27 年 5 月 13 日（水）～ 5 月 15 日（金）、東京ビッグサイトにて開催され、アカデミックフォーラムにおいて応用生物学部の教員が口頭発表を行いました。また展示ブースにおいて、各研究室の学生・大学院生が研究の説明を行い、多くのお客様にお越しいただきました。

「2015 年度先端食品セミナー」を開催

本学応用生物学部では、私たち国民が健康で活動的な生活が送れるよう、バイオテクノロジー技術を活用して機能性食品などの開発を行っています。昨年の本セミナーでは、将来の食品技術の課題について紹介しましたが、今回のセミナーでは食品の健康機能に焦点を当て、機能性食品の表示や動向、並びに食品の健康機能成分の探索とその応用を中心に、専門の先生方に解説して頂きます。皆様の参加をお待ちしております。

2015 年度先端食品セミナー「健康機能と食品」
■開催日：平成 27 年 9 月 1 日（火）13:00 ～ 18:30
■講演会：13:00 ～ 17:05 ／名刺交換会 17:15 ～ 18:30
■開催場所・会場：東京工科大学蒲田キャンパス 3 号館
■主催：東京工科大学
■協賛：日本食糧新聞社
■セミナー参加費：無料
■セミナー募集人数：先着順で 100 名様まで
■申込方法：本学ホームページ『先端食品セミナー』の参加申し込み
　　フォームからお申し込みください。
■本セミナーに関する問い合わせ先
東京工科大学 応用生物学部 今井 伸二郎
Tel&Fax. 042-637-2584
E-mail. imaishi @ stf.teu.ac.jp

Nissyoku

コンピュータサイエンス学部

大野澄雄教授が「教育 IT ソリューション EXPO」において講演

平成 27 年 5 月 20 日(水)～ 22 日(金)に東京ビッグサイトで開催された「教育 IT ソリューション EXPO」にて、大野澄雄コンピュータサイエンス学部教授が MOOC を活用した反転授業について講演しました。

セミナープログラム：
教育 IT ソリューション専門セミナー
教育のオープン化 【大学コース】
MOOC を活用した反転授業で理解度 UP ！

田胡和哉教授がマイクロソフト「第 13 回大学ＣＩＯフォーラム」において基調講演

平成 27 年 5 月 22 日に日本マイクロソフト株式会社品川本社にてマイクロソフト「第１３回大学ＣＩＯフォーラム」が開催され、田胡和哉コンピュータサイエンス学部教授が「フルクラウドの導入と大学戦略の実施 ～課題と効果～」について基調講演を行いました。

この内容は、マイクロソフトサイトにてレポート報告として紹介されました。

■マイクロソフト「大学ＣＩＯフォーラム」WEB
基調講演「フルクラウドの導入と大学戦略の実施 ～課題と効果～」

手塚悟教授が日本セキュリティ・マネジメント学会第 29 回全国大会において講演

平成 27 年 6 月 27 日 (土) に開催された日本セキュリティ・マネジメント学会第 29 回全国大会において、手塚悟コンピュータサイエンス学部教授が特別講演を行いました。

特別講演：手塚悟 氏（東京工科大学教授）
「我が国における安心安全な環境の実現
～マイナンバー、パーソナルデータ等～」
主催：日本セキュリティ・マネジメント学会
会場：東京大学生産技術研究所

メディア学部

学部学生がアプリコンテスト「DA・TE・APPS! 2015」にて UNITY 賞を受賞

平成 27 年 2 月 14 日 (土) に仙台で開催された、仙台地域の震災復興、経済発展を狙うアプリコンテスト「DA・TE・APPS ！ 2015」にて、メディア学部 2 年の 2 名が UNITY 賞（準優勝相当）を受賞しました。制作した「おにぎりコロコロ」は、コンテストのテーマである海外に向けたゲームアプリとして、日本の代表的な食文化である”おにぎり”を題材にした簡単操作のアプリです。

[アプリ部門] UNITY 賞
おにぎりコロコロ　－中野 芙羽奈さん、村上 和希さん
（メディア学部 2 年）

学部学生らが「GLOBAL MATH2014 コンテスト」にて Performance 賞等を受賞

平成 27 年 3 月 21 日（土・祝）ベネッセ新宿オフィスにて、株式会社ベネッセホールディングス主催の「GLOBAL MATH 2014 コンテスト」成果発表会が開催され、メディア学部生らの 8 チームが制作した数学ゲームをプレゼンテーションしました。審査の結果、応募 17 作品の中、チーム BEST の制作した「てくてくロボット」が Best Performance 賞（優勝相当）、チーム MAJISNOW の制作した「Halving Ice」が Cool Idea 賞（準優勝相当）を受賞しました。

GLOBAL MATH とは、世界中のプレイヤーが数学のゲームをプレイできて、世界中のクリエイターが自分の作ったゲームを披露できる数学的思考力が身につくようなゲームが集まるプラットフォームです。

チームBESTの村上 和希さん（2年）

チームMAJISNOW（全員2年）
星野紘輝さん、武藤礼記さん
松浦彩乃さん、山本祐輔さん

学生らの集合写真

寺岡丈博助教らがインタラクション 2015 においてインタラクティブ発表賞を受賞

平成27年3月5日（木）～7日（土）に開催された、情報処理学会の4研究会が主催するインタラクション技術に関するシンポジウム「インタラクション 2015」で寺岡丈博メディア学部助教らがインタラクティブ発表賞を受賞しました。

VISTouch －複数デバイスを用いた動的かつ立体的連携

安本匡佑、寺岡丈博

学部学生が第 77 回情報処理学会全国大会において学生奨励賞を受賞

平成27年3月17日（火）～19日（木）に京都大学吉田キャンパスで開催された第 77 回情報処理学会全国大会において、本学学生が発表した論文が学生奨励賞を受賞しました。

（指導教員：上林憲行）

受賞者：川島誠広（大学院メディアサイエンス専攻修士2年生）
受賞論文：ついみゅー:What are you listening now on Twitter?

受賞者：吉川裕貴（メディア学部4年）
受賞論文：対話型ゲーム「人狼」を活用したグループディスカッションの練習方法の提案

受賞者：齋藤彰人（メディア学部4年）
受賞論文：動画要約によるスキル獲得のための学習効果の検証～料理動画とそれをもとに要約を行ったレシピでの比較～

受賞者：横山誠（メディア学部4年）
受賞論文：Wikipediaからキーワードを援用し初出の知識の学習と学習コンテンツの発掘を支援するサービスの研究

受賞者：中川原真由子（メディア学部4年）
受賞論文：Memorage:セルフィ(自分撮り写真)をその場で集約して記念写真をコラージュするサービス

受賞者：宇賀景哉（メディア学部4年）
受賞論文：コエニティ:位置情報と連動した音声情報で場所への印象に付加価値をつけるコミュニティサービス

学部学生が映像表現・芸術科学フォーラム 2015 においてポスター発表優秀賞を受賞

平成 27 年 3 月 14 日に、早稲田大学国際会議場にて「映像表現・芸術科学フォーラム 2015」が開催され、メディア学部 3 年宮脇巧真さん（菊池研究室）が「ミニチュア映像におけるミニチュア感要素の抽出と観察者の感性との相関に関する研究」の研究成果を発表し、「ポスター発表優秀賞」を受賞しました。

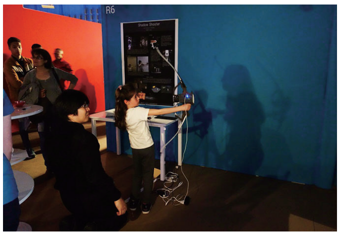
詳細は、メディア学部ブログ（4 月 5 日の記事）をご覧ください。

寺岡丈博助教らが Laval Virtual Awards 2015 の INTERFACE & MULTIPURPOSE EQUIPMENT 部門賞を受賞

平成27年4月8日～12日の期間に、フランスのラヴァルで開催されてたヨーロッパ最大のヴァーチャルリアリティの展覧会［17th International Conference and Exhibition of Virtual Technologies and Uses (Laval Virtual 2015)］が開催され、Interface & Multi-purpose Equipments の カ テ ゴ リ で、Laval Virtual Awards 2015 の INTERFACE & MULTIPURPOSE EQUIPMENT 部門賞を受賞しました。

受賞作品：VISTouch

安本匡佑 (神奈川工科大学)、寺岡丈博



AnimeJapan2015 に出展

本学メディア学部では平成 14 年 2 月に開催された東京国際アニメフェアに、大学からは初となるブースの出展をして以降毎年継続してブースを出展しています。

今年度も平成27年3月20日（金）～22日（日）に東京ビックサイトで行われた AnimeJapan2015 において、メディア学部学生の研究成果および教育成果発表を出展しました。

ブース名：東京工科大学メディア学部

出展内容：日本で初めての「メディア学部」を設置し、メディア社会における実践的教育をリードする東京工科大学の学生作品展示および教育成果発表。

近藤邦雄教授が画像情報教育振興協会編 コンピュータグラフィックス（改訂新版）を分担執筆

近藤邦雄メディア学部教授が分担執筆した画像情報教育振興協会（CG-ARTS 協会）編：コンピュータグラフィックス（改訂新版）が発行されました。本書はメディア学部の講義において、教科書指定されている書籍であり、20 年前より近藤教授が編集委員としてかかわっています。本書は国内において、「標準的な CG の教科書」として、多くの大学、大学院で活用されており、CG 検定試験の教科書として広く知られています。

分担執筆した第 6 章は、画像処理関係の章で、画像処理理論がコンピュータグラフィックス分野に活用されるようになり、CG の教科書の一部を占めるようになりました。また、近藤教授の研究成果の CG 画像が掲載されています。

岸本好弘特任准教授がスウェーデンのウプサラ大学にて招待講演

平成 27 年 5 月 25 日～ 26 日にスウェーデンのウプサラ大学芸術学部ゲームデザイン学科主催により開催されたゴットランド・ゲーム・カンファレンス (Gotland Game Conference) において、岸本好弘メディア学部特任准教授が招待講演を行いました。

タイトル :『Video games and Japanese Culture』

講演内容 : いまや世界中で愛される日本のビデオゲームの背景には、2000 年にわたる日本の歴史と独自の文化があることを事例に挙げて紹介しました。

『ゲームの力で世界を救え！第 3 回シリアスゲームジャム』開催報告

平成 27 年 2 月 21 日～ 22 日に『ゲームの力で世界を救え！第 3 回シリアスゲームジャム』が都内会場で開催されました。「英語学習」「サイバーセキュリティ」をテーマとした過去 2 回の実績を踏まえ、今回は「インターネットの安全な使い方を学ぶ小中学生向けのゲーム」がテーマです。参加者は本学の学生 14 名のほか、プロのゲーム開発者やサイバーセキュリティの専門家など 35 名。5 つのチームに分かれ、日本ネットワークセキュリティ協会（JNSA）の全面協力を得て、情報セキュリティに関する知識を楽しく学べるゲームの制作に取り組みました。

■ 1 日目　平成 27 年 2 月 21 日（土）10 時～ 20 時

まず、主催者を代表して岸本好弘メディア学部特任准教授が開会の言葉を述べたあと、後援者である NPO 法人日本ネットワークセキュリティ協会 (JNSA) の下村正洋事務局長よりご挨拶をいただきました。つづいて「オープニング講演」として、日本大学生産工学部の古市昌一教授による『世界のシリアスゲーム事情』をテーマとしたお話をいただきました。

そして、いよいよ「ゲームジャム」のスタートです。参加者紹介を兼ねて、各チームの企画をプレゼンテーションし、サイバーセキュリティの専門家、およびゲーム制作の専門家の立場から講評していただきました。 その後、チーム毎に制作作業に入り、 1 日目の作業は 20 時で終了しました。

■ 2 日目　平成 27 年 2 月 22 日（日）10 時～ 18 時

まず、昨日の作業状況を「中間発表」した後、2 日目の作業を開始。16 時で全作業を終了とし、「最終発表」を行いました。シリアスゲームジャム運営委員会 8 名による審査の結果、5 作品の中から「最優秀賞」「準優秀賞」が選ばれ、表彰式が行われました。最終発表会および表彰式には多くの取材・見学者を迎え、大賑わいのうちに終了しました。

すべてのプレゼンテーションの様子は、Ustream で配信しました。

また、今回の情報は、「シリアスゲームジャム公式ホームページ」、および「ファミ通 .com」でご覧頂けます。

工学部

三橋郁助教が電気学会産業応用部門研究会にて「部門優秀論文発表賞」および SI2014 にて「優秀講演賞」のダブル受賞

三橋郁工学部機械工学科助教が平成 27 年 3 月 4 日に、首都大学東京秋葉原サテライトキャンパスで開催された電気学会産業応用部門（人間支援技術）研究会にて「Microsoft Kinect による 3 次元モデリングジェスチャーの検討」の研究発表で「部門優秀論文発表賞」を受賞しました。

また、平成 26 年 12 月 17 日に、東京ビックサイトで開催された SI2014（第 15 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会）にて「3 次元 Direct Drawing による描画手法の機能性評価（直感的立体描画手法の提案の評価）」の研究発表で「優秀講演賞」を受賞しました。

芝池成人教授が国際会議「QuEST Forum 2015 APAC BEST PRACTICES CONFERENCE」で講演

平成 27 年 4 月 13 日～ 16 日にウェスティン東京ホテルで開催された、通信プロダクト・サービスの品質向上を主眼においた世界的業界団体「QuEST Forum」主催の国際会議「QuEST Forum 2015 APAC BEST PRACTICES CONFERENCE」で、芝池成人工学部機械工学科教授が、本学のサステイナブル工学の取り組みおよびコーオプ教育を紹介する講演（Keynote Speech）を行いました。

講演名：「Sustainable Engineering, Practical Studies for Building a Sustainable Society」
内　容：工学部が標榜する「サステイナブル工学」の研究概要と教育方針、さらにコーオプ教育との連携も含めた複合的なカリキュラム構成についての紹介

デザイン学部

聖路加国際病院・すみだ水族館と協力してワークショップを実施

本学デザイン学部 bee プロジェクトは、平成 27 年 2 月 27 日 (金) に聖路加国際病院と協力して都内の病院でワークショップを開催しました。bee プロジェクトはこれまですみだ水族館や京都水族館など、いくつもの水族館で子どもたちを対象とした体験プログラムとしてワークショップを企画実施してきました。

若林尚樹デザイン学部授の指導のもとデザイン学部の 1 年生から 4 年生までの学生約 20 人が参加し、ワークショップの企画から教材のデザインや制作、当日の進行や参加者のサポートなど水族館とのコラボレーションとして進めてきました。

今回のワークショップはすみだ水族館と小児病棟の保育士とが協力して、病院に入院する子どもたちを対象に実施するものです。一昨年から継続しているもので、今回で 4 回目となるワークショップです。

病棟の子どもたちに、水族館の楽しさや生きものの面白さや素晴らしさを少しでも体験してもらい、興味を持ってもらうことをテーマにしています。すみだ水族館で昨年 8 月に実施したワークショップ「ペンギンになる方法 - ペンギンの泳ぎ方」のために bee プロジェクトでデザインした教材を使用して、水族館で行っているワークショップをそのまま病棟で実施することをコンセプトとしています。

水族館内のワークショップで重要な点は、ワークショップの中で生き物を観察に行けるという点にあります。今回は、水族館の外で実施するワークショップであることから、ペンギンの飼育スタッフに参加してもらうなど、施設の外で実施するワークショップの課題を検討しながら準備を進めました。

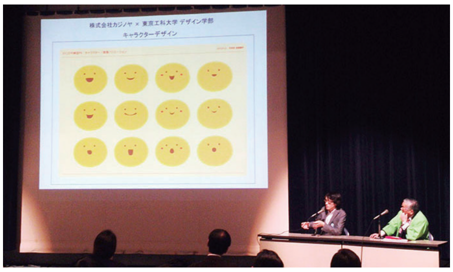
デザイン学部教員が「かわさきコンテンツ活用研究会」においてプロモーション映像を制作

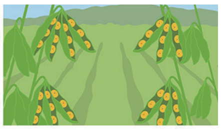
川崎市の推進する「かわさきコンテンツ活用研究会」において、デザイン学部では「映像と構成研究室」を中心とした教員チームと株式会社カジノヤとのプロジェクトとして「商品」をＰＲするためのアニメーションを制作しました。

食品展示会等において、バイヤーやお客様の注目を引くために効果的・特徴的な演出方法は何かということをコンセプトに、子供にも親しみやすいキャラクターデザイン、ＰＲアニメーションの動きを研究、制作しました。

平成 27 年 2 月 12 日、川崎市産業振興会館において開催された「川崎コンテンツ産業フォーラム」にて、プロジェクト内容・制作過程等を発表し、完成した PR アニメーションを上映しました。

今後、各種イベント会場や PR 活動等で使用される予定です。





暮沢剛巳准教授が執筆した『世界のデザインミュージアム』の台湾版が出版される

昨年、出版した暮沢剛巳デザイン学部准教授の著書『世界のデザインミュージアム』（大和書房）の台湾版『全球最得造法的設計博物館』が出版されました。

【金石堂網路書店 WEB サイトより引用】

伊藤潤助教の手がけた製品が新「現代日本のデザイン 100 選」展で展示される

平成27年4月15日～6月14日の期間にメキシコ/もののもの美術館(メキシコシティ)にて新「現代日本のデザイン 100 選」展が行われ、伊藤潤デザイン学部助教の手がけた製品が展示されました。

新「現代日本のデザイン 100 選」とは独立行政法人国際交流基金が、現代における日本デザインの傾向や特色を示すのみならず、日本文化の現況を紹介することを試みて選定した、プロダクトデザイン（家具、家電、文具、食器、衣服、医療品、乗り物など）を中心に、主に 2010 年以降に生み出された 89 点と、日本デザインの源流ともいえる戦後モダンデザイン 11 点を展示するものです。

製品名：超撥水風呂敷『ながれ』

製造企業：朝倉染布株式会社

（上記製品のブランドディレクターを伊藤潤助教が務めました）

製品概要：

超撥水風呂敷『ながれ』は、明治 25 年創業の朝倉染布の独自技術『dewelryR』加工が施され、正統進化を遂げた「濡れない風呂敷」です。水泳の世界トップアスリートの水着にも利用されている技術ですが、元は赤ちゃんのオムツカバーに使われていた技術を発展させたものであり、日本の伝統文化と最新技術が融合した製品となっています。「古典的で再使用可能な包装である風呂敷に、超撥水という際立った特徴を付与し、最適化することに成功している」と国内外で評価され、2011 年度の「グッドデザイン賞」における特別賞「中小企業庁長官賞（現・ものづくりデザイン賞)」や、世界で最も歴史の長い米国の「グッドデザイン賞（GOOD DESIGN 2011)」、また世界最高峰とされる「レッドドットデザイン賞（red dot award: product design 2013 “honourable mention”)」を受賞しています。

「超撥水風呂敷『ながれ 』」の撥水生地は、水泳の世界トップアスリートの水着に使用されている高い性能をもつ素材であり、「撥水風呂敷」という新しい製品としてビジネス系のテレビ番組等や新聞などでも取り上げられるなど、製品としてのポテンシャルが高いものでしたが、ブランディング面では改善の余地がありました。

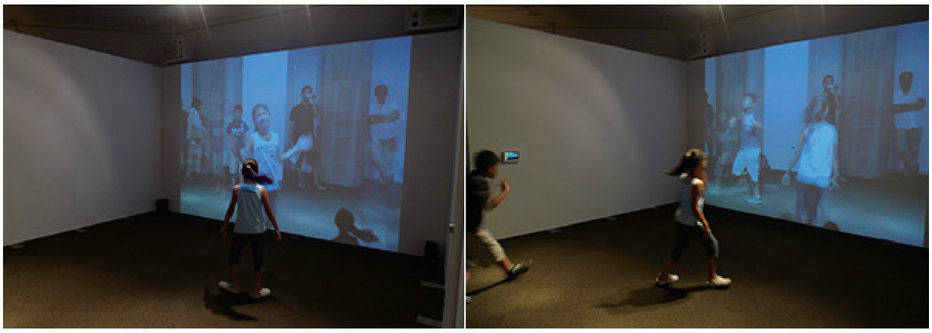
伊藤潤助教は、デザインマネジメントの観点より、製品自体のテキスタイルデザインだけでなく、ロゴデザインなどの VI（ビジュアルアイデンティティ）の開発、製品特性や使用シーンを視覚的に伝えるための写真のアートディレクション、カタログブックのデザイン、展示会ブースのデザインまでを総合的に行い、ショップのバイヤーやエンドユーザーへの訴求を強化しました。さらには風呂敷ならではの慶弔事贈答用途の為の包装紙のデザインや、WEB サイトや SNS による情報発信とユーザーコミュニケーションまでを手がけています。

また、国内外のデザイン賞へのエントリーを日本語、英語、ドイツ語で行い、高い評価を受けることによって製品の認知だけでなく企業価値の向上にも貢献しています。

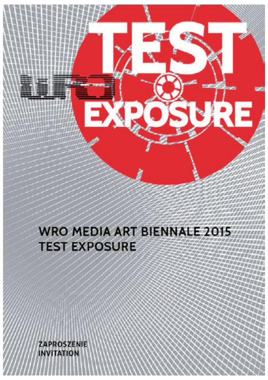
松村誠一郎准教授のインタラクティブアート作品が招待展示される

平成 27 年 5 月 13 日から17日の期間に、ポーランドのヴロツワフで開催された 16th Media Art Biennale WRO 2015 "TEST EXPOSURE" にて、松村誠一郎デザイン学部准教授のインタラクティブアート作品「Dancing Mirror」が採択され、招待展示を行ないました。

このビエンナーレは 1989 年以来、2 年に 1 回開催されてきたポーランド最大のコンテンポラリーアートフェスティバルです。2013 年に開催された前回では 200 名強のアーティストがヴロツワフ中心部の 18 会場で展示を行い、招待ゲスト約 1000 人と一般観客約 11 万人の動員数を記録しました。今回は全世界 80 ヶ国からの 2500 近い応募の中から、178 名(組)のアーティストが選抜されました。



Dancing Mirror



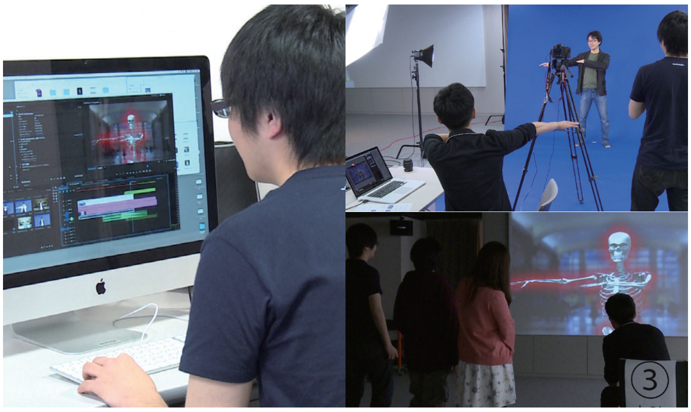
「地域の観光 PR プロジェクト」、はじまる。

昨年度にスタートした「デザイン開発プロジェクト」に加え、デザイン学部では「視覚デザイン専攻」「映像デザイン専攻」コースの教員が、新たに「地域の観光 PR プロジェクト」を立ち上げ、推進していきます。「訪れる人」と「住む人」のより豊かなつながりをつくりだすことを目的とし、ビジュアルコミュニケーションデザインによる、地域の活性化をめざすものとして、観光ポスター、パンフレット、PR 映像等を制作し、大田区の魅力を発信していくプロジェクトです。デザイン学部の所在地である世界の玄関口の羽田空港のある大田区との連携を考え、活動を進めていきます。

写真は、デザイン学部 3 年生の「専門演習 I の課題」で行なった大田区を紹介する CM の中からピックアップしたものとポスターイメージを参考として掲載しています。

学部学生により、高校生が映像インスタレーションを体感。

デザイン学部ではオープンキャンパスで、体感映像インスタレーションを実施しています。参加した高校生がデザイン学部の学生と教員の指導を受けて、映像体験にチャレンジするワークショップです。内容は自分が他人や別のキャラクターに変身してしまうというもの。1 人がアクションポーズを取り、もう 1 人がそれを受けて変身します。参加した高校生は、わざと難しい動きやポーズをとったりして友達に受けのポーズができないよう困らせたりして面白がっていました。別の人になってしまう映像体験を人と人とのつながりとして感じて楽しんでいたようです。学生は撮影と、合成や編集の方法を高校生に教えてあげています。わきあいあいとデジタル映像パフォーマンスを繰り広げ、友達同士のふれあいや学生とのふれあいがありました。参加してくれた高校生達は、デジタルを使った映像スキルに触れることができ、映像表現、ビジュアル表現の面白さに目覚めたようです。



バイオ・情報メディア研究科

大学院バイオニクス専攻生が生物発光化学発光研究会よりルミカ化学発光ポスター賞を受賞

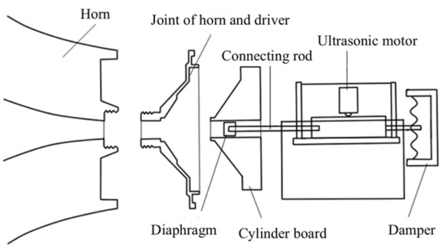
平成 26 年 11 月 1 日（土）に開催された生物発光化学発光研究会第 31 回学術講演会において、大学院バイオニクス専攻修士 2 年生加藤潤君（担当教員：佐々木聡）がルミカ化学発光ポスター賞を受賞しました。

受賞題目：「菌密度と発光強度の同時計測可能な小型デバイスの作製」

大学院コンピュータサイエンス専攻生が日本音響学会春季研究発表会にて第 11 回学生優秀発表賞を受賞

平成 27 年 3 月 16 日（月）に中央大学で開催された日本音響学会春季研究発表会での発表において、本学大学院コンピュータサイエンス専攻修士課程 2 年生長岡大地さんが、第 11 回学生優秀発表賞を受賞しました。

タイトル：
1-10-17 直動式超音波モータを用いたホーンスピーカシステム
Horn loudspeaker driven by linear motion type piezoelectric ultrasonic motors



概要：
東日本大震災以降、防災用スピーカとして能率の良いホーンスピーカに対する関心が高まっている。その構造は古くから変わっておらず、十分な体積速度を得るためにホーン咽喉に対して振動板を大きくし、波面を揃えるためのイコライザを内包した構造が一般的であり、若干複雑である。我々はこれまでに超音波モータを用いた大振幅動作が可能なスピーカシステムをいくつか開発している。これを活かし、ホーン咽喉と同程度の直径の振動部を使用することでイコライザを排した、新たなホーンスピーカシステムを開発した。

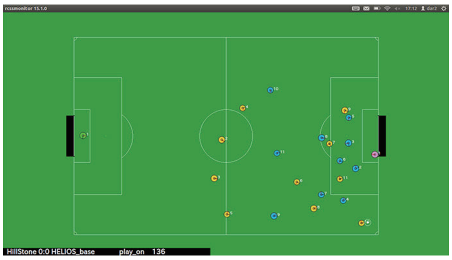
大学院コンピュータサイエンス専攻生が「RoboCup Japan Open 2015」に参加

平成 27 年 5 月 2 日～ 4 日に福井市で開催された RoboCup Japan Open 2015 に、大学院コンピュータサイエンス専攻 2 年生の荻元裕紀さんと亀田教授、渡邊助教が玉川大学との混成チームとして参加しました。

ロボカップは人工知能とロボット工学の研究者を中心に、人間のような知能と動作を可能とするロボット開発の向上を目指した競技で、「ロボカップサッカー」、災害現場での救助を行う「ロボカップレスキュー」、家庭で人と共同作業を行う「ロボカップ @ ホーム」の 3 つのリーグ制として開催されています。

我々はロボカップサッカーシミュレーション 2D リーグという PC 上で動く自律型コンピュータエージェントの大会に出場しました。

参加チーム名：HillStone_United 2D
参加メンバー：亀田弘之教授、渡邊紀文助教、
　　　　　　　大学院生荻元裕紀さん



TUT Information

人事（採用、任命、昇格、退職）

1．採用

平成27年7月1日付

職　位	所　属	氏　名
助手	医療保健学部　看護学科	西川　さやか

平成27年6月1日付

職　位	所　属	氏　名
助教	医療保健学部　作業療法学科	池田　晋平

平成27年5月1日付

職　位	所　属	氏　名
教授	応用生物学部	横山　憲二

平成27年4月1日付

職　位	所　属	氏　名
教授	コンピュータサイエンス学部	渡辺　正浩
	メディア学部	大淵　康成
	工学部　電気電子工学科	新海　健
	工学部　電気電子工学科	髙木　茂行
	工学部　応用化学科	片桐　利真
	デザイン学部	石塚　昭彦
	教養学環	十島　純子
准教授	メディア学部	竹島　由里子
	工学部　応用化学科	原　賢二
講師	医療保健学部　看護学科	影山　佳奈
	医療保健学部　看護学科	井口　理
	医療保健学部　臨床検査学科	榎本　みのり
助教	応用生物学部	筒井　裕文
	コンピュータサイエンス学部	喜多　義弘
	工学部　機械工学科	上野　祐樹
	医療保健学部　看護学科	鈴木　佳代
	医療保健学部　看護学科	染谷　奈々子
	医療保健学部　看護学科	阿部　玲子
	医療保健学部　看護学科	井口　紗織
	医療保健学部　臨床工学科	荻野　稔
	医療保健学部　臨床工学科	加納　敬
	医療保健学部　理学療法学科	飛山　義徳
	医療保健学部　臨床検査学科	亀田　貴寛
	医療保健学部　臨床検査学科	伊藤　さやか
	医療保健学部　臨床検査学科	市川　由理
	医療保健学部　臨床検査学科	花尾　麻美
	デザイン学部	御幸　朋寿
助手	メディア学部	濱村　真理子
	メディア学部	鶴田　直也
実験助手	応用生物学部	永瀬　翠
	工学部　機械工学科	矢島　卓
	工学部　電気電子工学科	甲田　陽平
	工学部　応用化学科	寺地　勇人

2．任命

平成27年6月1日付

命	所　属	氏　名
大学院メディアサイエンス専攻長	メディア学部　教授	近藤　邦雄

命	氏　名
蒲田キャンパス業務課係長	伊藤　秀一
蒲田キャンパス学務課勤務	市川　久美子
八王子キャンパス学務課勤務	西本　吉宏
情報サービス課（蒲田キャンパス担当）勤務）	重廣　貞仁

平成27年4月1日付

命	所　属	氏　名
応用生物学部長	応用生物学部　教授	梶原　一人
コンピュータサイエンス学部長（再任）	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　教授	亀田　弘之
メディア学部長（再任）	メディア学部　教授	相川　清明
工学部長	工学部機械工学科　教授	大山　恭弘
医療保健学部長	臨床工学科　教授	梅田　勝
デザイン学部長（再任）	デザイン学部　教授	池田　政治
教養学環長	教養学環　教授	奥　正廣
工学部　機械工学科長、工学部長補佐	工学部機械工学科　教授	松尾　芳樹
工学部　電気電子工学科長 工学部長補佐	工学部電気電子工学科　教授	茂庭　昌弘
工学部　応用化学科長、工学部長補佐	工学部応用化学科　教授	山下　俊
看護学科長（再任）、医療保健学部長補佐	看護学科　教授	木内　妙子
臨床工学科長（再任） 医療保健学部長補佐	臨床工学科　教授	篠原　一彦
理学療法学科長、医療保健学部長補佐	理学療法学科　教授	髙橋　哲也
作業療法学科長（再任） 医療保健学部長補佐	作業療法学科　教授	奈良　進弘
臨床検査学科長（再任） 医療保健学部長補佐	臨床検査学科　教授	細萱　茂実
片柳研究所長（再任） 工学部コーオプセンター長	工学部電気電子工学科　教授	笹岡　賢二郎
メディアセンター長（再任） コンピュータサイエンス学部長補佐	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　教授	田胡　和哉
学長補佐（再任）、教務部長（再任）	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　教授	大野　澄雄
学長補佐（再任）、学生部長（再任）	応用生物学部　教授	高柳　勉
学長補佐、就職部長	応用生物学部　教授	多田　雄一
応用生物学部長補佐	応用生物学部　教授 応用生物学部　教授	矢野　和義 前田　憲寿
ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部長補佐（再任） IR センター長	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　教授	竹田　昌弘
ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部長補佐（再任）	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　教授	松下　宗一郎
メディア学部長補佐（再任）	メディア学部　教授	柿本　正憲 宇佐美　亘
メディア学部長補佐	メディア学部　教授	進藤　美希

平成27年4月1日付

命	所　属	氏　名
デザイン学部長補佐（再任）	デザイン学部　教授	黒川　修一
		山岡　俊平
教養学環長補佐	教養学環　教授	佐久間　裕司
		稲葉　竹俊
大学評議会委員	応用生物学部　教授	杉山　友康
	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　教授	木下　俊之
	メディア学部　教授	佐々木　和郎
	工学部　応用化学科　教授	髙橋　昌男
	デザイン学部　教授	竹本　正壽
	医療保健学部看護学科　教授	澁谷　恵子
	教養学環　教授	豊田　ひろ子
大学院バイオ・情報メディア研究科長	メディア学部　教授	上林　憲行
大学院バイオニクス専攻長（再任）	応用生物学部　教授	佐藤　淳
大学院コンピュータサイエンス専攻長	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　教授	上田　裕巳
大学院アントレプレナー専攻長（再任）	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　教授	目黒　良門
東京工科大学安全管理者（再任）	応用生物学部　教授	浦瀬　太郎
応用生物学部勤務	応用生物学部勤務 作業療法学科兼務　教授	矢野　和義
工学部　機械工学科勤務 コンピュータサイエンス学部兼務	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　教授	大山　恭弘
		松尾　芳樹
		芝池　成人
		佘　錦華
		古井　光明
	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　准教授	三田　俊裕
	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　講師	関口　暁宣
	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　助教	三橋　郁
工学部　機械工学科勤務 メディア学部兼務	メディア学部　教授	髙橋　秀智
		福島　E. 文彦
	メディア学部　講師	大久保　友雅
工学部　電気電子工学科勤務 コンピュータサイエンス学部兼務	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　教授	茂庭　昌弘
		鶴岡　誠
		木村　康男
		前田　就彦
	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　准教授	坪川　宏
		黒川　弘章
工学部　電気電子工学科勤務	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　教授	笹岡　賢二郎
工学部　電気電子工学科勤務 メディア学部兼務	メディア学部　准教授	天野　直紀
工学部　電気電子工学科勤務 ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部・メディア学部兼務	メディア学部勤務 ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部兼務	加藤　秀行
工学部　応用化学科勤務 応用生物学部・ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部兼務	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部勤務 応用生物学部兼務　教授	山下　俊
		髙橋　昌男
		西尾　和之
	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部勤務 応用生物学部兼務　講師	森本　樹
	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部勤務 応用生物学部兼務　助教	松山　直人
工学部　応用化学科勤務 応用生物学部・メディア学部兼務	メディア学部勤務 応用生物学部兼務　教授	江頭　靖幸
		須磨岡　淳
	メディア学部勤務 応用生物学部兼務　講師	上野　聡
応用生物学部兼務	工学部　応用化学科　教授	片桐　利真
	工学部　応用化学科　准教授	原　賢二
コンピュータサイエンス学部兼務	工学部　電気電子工学科　教授	新海　健
		髙木　茂行
	工学部　電気電子工学科　助教	上野　祐樹
医療保健学部　作業療法学科勤務	教養学環　教授	阿部　達彦
教養学環勤務、応用生物学部兼務	教養学環　准教授	加柴　美里
教養学環勤務、ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部兼務	教養学環　教授	高橋　潔
	教養学環　准教授	富沢　真也
	教養学環　講師	加用　一者
大学院バイオ・情報メディア研究科 バイオニクス専攻博士後期課程及び 修士課程担当	応用生物学部　教授	今井　伸二郎
	工学部　応用化学科　教授	片桐　利真
大学院バイオ・情報メディア研究科 バイオニクス専攻博士後期課程及び 修士課程担当	応用生物学部　准教授	村上　勝彦
	工学部　准教授	原　賢二
大学院バイオ・情報メディア研究科 バイオニクス専攻、ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ専攻 博士後期課程及び修士課程担当	工学部　教授	山下　俊
		髙橋　昌男
		西尾　和之
	工学部　講師	森本　樹
大学院バイオ・情報メディア研究科 バイオニクス専攻、ﾒﾃﾞｨｱｻｲｴﾝｽ専攻 博士後期課程及び修士課程担当	工学部　教授	江頭　靖幸
		須磨岡　淳
	工学部　講師	上野　聡
大学院バイオ・情報メディア研究科 コンピュータサイエンス専攻 博士後期課程及び修士課程担当	工学部　教授	茂庭　昌弘
		前田　就彦
		古井　光明
		新海　健
		木村　康男
大学院バイオ・情報メディア研究科 メディアサイエンス専攻 博士後期課程及び修士課程担当	工学部　教授	髙橋　秀智
		福島　E. 文彦
	メディア学部　教授	大淵　康成
	メディア学部　准教授	竹島　由里子
	工学部　講師	大久保　友雅
大学院バイオ・情報メディア研究科 コンピュータサイエンス専攻 博士後期課程担当	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ学部　教授	石畑　宏明
大学院バイオ・情報メディア研究科 バイオニクス専攻修士課程担当	応用生物学部　助教	本間　太郎
大学院バイオ・情報メディア研究科 バイオニクス専攻、ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｻｲｴﾝｽ専攻 修士課程担当	工学部　助教	松山　直人
大学院バイオ・情報メディア研究科 メディアサイエンス専攻修士課程担当	工学部　助教	加藤　秀行

大学事務局

命	氏　名
事務局次長 （八王子キャンパス業務課、研究協力課、情報サービス課担当）	田中　祐輔
事務局次長 （八王子キャンパス学務課、キャリアサポートセンター担当）	豊嶋　信一
事務局次長 （蒲田キャンパス業務課・学務課担当）、 蒲田キャンパス業務課課長・学務課課長兼務	菅野　真智男
事務局キャリアサポートセンター長（課長待遇）	三好　公秀
事務局キャリアサポートセンター課長補佐（課長事務取扱）	岸田　克明
八王子キャンパス学務課課長補佐	堀田　耕稔
八王子キャンパス業務課係長	篠崎　敏明
	内田　政宏
八王子キャンパス業務課勤務	上條　君代
蒲田キャンパス学務課勤務	加藤　志保

3．昇格

平成27年4月1日付

職　位	所　属	氏　名
教授	メディア学部　准教授	進藤　美希
	工学部　電気電子工学科　准教授	前田　就彦
	医療保健学部　看護学科　准教授	五十嵐　千代
	デザイン学部　准教授	伊藤　丙雄
准教授	医療保健学部　看護学科　講師	小林　小百合
	デザイン学部　講師	末房　志野
	教養学環　講師	加柴　美里
助教	応用生物学部　助手	本間　太郎
	デザイン学部　助手	伊藤　潤
	デザイン学部　助手	高橋　庸平

4．退職

平成27年6月13日付

所　属	氏　名
メディア学部　講師	中川　誠

平成27年5月31日付

所　属	氏　名
医療保健学部　看護学科　助手	久我　容子

平成27年3月31日付

所　属	氏　名
コンピュータサイエンス学部　教授	市村　哲
	中村　太一
	佐藤　明雄
	坪井　利憲
	尾崎　弘之
医療保健学部　看護学科　教授	六角　僚子
医療保健学部　臨床工学科　教授	加藤　洋
医療保健学部　作業療法学科　教授	柳澤　信夫
教養学環　教授	植田　麻実
メディア学部　准教授	大谷　義智
	渡部　健司
メディア学部　講師	櫻井　圭記
応用生物学部　助教	津久井　隆行
コンピュータサイエンス学部　助教	田所　裕康
	政倉　祐子
	伊東　拓
メディア学部　助教	安本　匡佑
医療保健学部　看護学科　助教	瀬尾　昌枝
	田村　南海子
	三好　智美
	堀内　朋子
	柴田　真希
医療保健学部　臨床工学科　助教	木浦　千夏子
	新保　年弘
	塚尾　浩
医療保健学部　作業療法学科　助教	光金　正官
医療保健学部　看護学科　助手	天野　絵美
	川上　文子
	関　由香里
	林　幸子
	金　さやか
蒲田キャンパス業務課	塩川　鉄雄
八王子キャンパス業務課	太田　満
	津村　和秀

訃報

◆木村幸男　元工学部機械制御工学科教授

本学名誉教授、木村 幸男（きむら ゆきお）元工学部機械制御工学科教授（満 76 歳）が、平成 27 年 6 月 3 日に逝去されました。平成 5 年 4 月から東京工科大学工学部機械制御工学科教授として勤務。学内における教務部長、機械制御工学科主任教授を勤められ、平成 17 年 9 月に退職。平成 17 年 10 月から東京工科大学名誉教授の称号授与。

ここに安らかなお眠りをお祈り申しあげます。

外部研究費関連

1．平成27年度学術研究助成基金助成金/科学研究費補助金（新規課題）

研究種目	研究代表者名	研究課題名
新学術領域研究 （研究領域提案型）	森本　樹 （工学部　応用化学科講師）	二酸化炭素捕捉機能を付与した光触媒による二酸化炭素還元反応の効率化
基盤研究（B）（一般）	榎本　美香 （メディア学部講師）	祭りの支度を通じた共同体 < 心体知 > の集団学習メカニズムの解明
基盤研究（C）（一般）	近藤　邦雄 （メディア学部教授）	映像分析に基づくライティング情報の体系化とその評価手法の提案
	山下　俊 （工学部　応用化学科教授）	光自励振動型フォトメカニカル材料の開発
	原　賢二 （工学部　応用化学科准教授）	高密度単分子層触媒のマイクロデバイス化
	森本　樹 （工学部　応用化学科講師）	二酸化炭素の回収・濃縮および還元の両機能を併せ持つ金属錯体光触媒系の開発
	森田　夏実 （医療保健学部　看護学科教授）	患者参画による患者の病い体験を尊重できる医療者育成のためのウェブサイト構築と評価
	太田　浩子 （医療保健学部　看護学科講師）	シミュレーティッドリアリティ臨地実習体験による看護実践過程教育システム開発
	太田　祐子 （医療保健学部　看護学科講師）	キャリア中期ジェネラリスト看護師の、物語としてのキャリア創出に関する研究
	苗村　潔 （医療保健学部　臨床工学科准教授）	硬膜外腔内視鏡下手術における癒着剥離用超音波デバイスの開発
	日向　奈惠 （医療保健学部　臨床工学科講師）	FFT 法と領域法を組み合わせた DNA ploidy 解析によるがん診断法の研究
挑戦的萌芽研究	酒井　弘美 （医療保健学部　作業療法学科准教授）	片麻痺上肢に対するポータブル機能訓練機器の開発
	吉田　祥子 （医療保健学部　臨床検査学科准教授）	液状化検体細胞診（LBC）検体を用いた子宮頸癌関連遺伝子異常の解析
若手研究（B）	阿部　周司 （応用生物学部助教）	再凍結された冷凍すり身の有効利用および再凍結によるゲル形成能劣化抑制に関する研究

研究種目	研究代表者名	研究課題名
若手研究（B）	来須　孝光 （応用生物学部助教）	タペート層のオートファジー制御によるイネ冷温障害打破の試み
	吉田　亘 （応用生物学部助教）	DNA メチル化反応を触媒するリボザイムの同定と領域特異的メチル化方法の開発
	寺岡　丈博 （メディア学部助教）	連想インタラクションに基づく日本語語彙学習システムの開発
	塩満　芳子 （医療保健学部　看護学科助教）	福祉避難所における在宅高齢者への看護支援モデル構築

2．平成 27 年度学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金（継続課題）

研究種目	研究代表者名	研究課題名
基盤研究（B）（一般）	木村　康男 （工学部　電気電子工学科教授）	多成分同時測定ワンチップガスセンサのためのセルフアラインメント局所陽極酸化技術
	野澤　美江子 （医療保健学部　看護学科教授）	がん生殖医療の視点で取り組む「がん患者の妊孕性温存の意思決定支援モデル」の開発
基盤研究（B）（海外学術調査）	福島　E. 文彦 （工学部　機械工学科教授）	ロボットシステムによる地雷探知および地雷・金属片判別技術の研究開発
基盤研究（C）（一般）	浦瀬　太郎 （応用生物学部教授）	排水処理における臭気物質の生成および低減と水環境中に残留する臭気
	佐藤　拓己 （応用生物学部教授）	熱ショック蛋白質を誘導して網膜を保護する分子のケミカルバイオロジー
	柴田　雅史 （応用生物学部教授）	アントシアニンとメソ細孔体の複合化による天然色素系フォトクロミック材料の開発
	矢野　和義 （応用生物学部教授）	高感度プロテオミクスを指向したナノ構造基板による高機能バイオチップの創製
	山本　順寛 （応用生物学部教授）	生死を分けるリスクファクターの加齢による変化
	秋元　卓央 （応用生物学部准教授）	薄膜干渉基板の蛍光増強効果を利用した高コントラスト蛍光顕微鏡の開発
	村上　勝彦 （応用生物学部准教授）	異質データの相関解析による潜在的概念モジュールの同定
	石畑　宏明 （コンピュータサイエンス学部教授）	大規模並列コンピュータの通信ネットワーク中の通信状況可視化技術の開発
	上田　裕巳 （コンピュータサイエンス学部教授）	超高速通信を可能にする経済的な光アクセスネットワーク構成法に関する研究
	吉村　徹三 （コンピュータサイエンス学部教授）	蛍光ターゲティング効果を用いた自己組織化光回路
	生野　壮一郎 （コンピュータサイエンス学部准教授）	次世代分散処理環境を前提とした完全メッシュレス法の開発と工学的応用
	菊池　眞之 （コンピュータサイエンス学部講師）	３次元物体表面の脳内表現様式と表面内外の知覚特性の解明
	柿本　正憲 （メディア学部教授）	累進焦点レンズの設計最適化
	竹島　由里子 （メディア学部准教授）	科学技術データにおける多変量データのための融合可視化環境の構築
	松永　信介 （メディア学部准教授）	算数障がいを抱える聴覚障がい児の基礎算術運用力の向上を支援する AHS の構築
	大山　恭弘 （工学部　機械工学科教授）	経験価値の見える化を用いた共創的ものづくり教育プラットフォームの開発と検証
	佘　錦華 （工学部　機械工学科教授）	下肢関節障害に適合した健康増進電動カートの開発
	古井　光明 （工学部　機械工学科教授）	Mg の結晶ランダム・微細化により室温でのねじ転造を実現するねじり戻し調整法の開発
	西尾　和之 （工学部　応用化学科教授）	アノード酸化による金多孔質皮膜の作製
	荒添　美紀 （医療保健学部　看護学科准教授）	中堅看護師の「ヒューマンスキル及びコンセプチュアルスキル教育プログラム」の構築
	妹尾　弘子 （医療保健学部　看護学科准教授）	精神障害者の就労継続における同僚との関わりのプロセス
	吉武　久美子 （医療保健学部　看護学科准教授）	人の生命・健康に関わる医療情報の価値構造の研究
	下村　美文 （医療保健学部　臨床工学科講師）	酵母による分解と超音波霧化技術を併用した木質系廃棄バイオマスの高度有効活用
	大島　隆一郎 （医療保健学部　作業療法学科准教授）	妊婦の「低体重（やせ）」が乳幼児の発達に与える影響とその予防
	暮沢　剛巳 （デザイン学部准教授）	万博に見る芸術の政治性ー紀元 2600 年博の考察と国際比較を中心に
	酒百　宏一 （デザイン学部准教授）	アートをまちにひらくことによる新たな地域振興と芸術表現のかたち
	稲葉　竹俊 （教養学環教授）	大規模かつ多様な学習データを活用した知的協調スクリプト実行システムの開発と評価
	陳　淑梅 （教養学環教授）	反転授業に基づいた中国語学習モデルの提案と学習支援システムの構築
	十島　純子 （教養学環教授）	蛍光イメージングによるエンドサイトーシス経路の網羅的解析
	Christopher P. Brocklebank （教養学環准教授）	The Eighteenth-Century Periodical Essay：A Corpus-based Approach
	安藤　公彦 （片柳研究所助教）	リフレクション支援装置による美術館教育への解釈共有フェーズの導入と評価

研究種目	研究代表者名	研究課題名
挑戦的萌芽研究	山崎　晶子 （メディア学部准教授）	外国人児童と日本人保育士の相互行為における身体性と言語的行為に関する社会学的研究
	小松　泰喜 （医療保健学部　理学療法学科教授）	脳波解析による認知機能低下者の特性とその横断的検討
	高橋　哲也 （医療保健学部　理学療法学科教授）	閉塞性動脈硬化症の下肢血行再建術後の新しいリハビリ看護ケアプログラムの開発
	栗田　英明 （医療保健学部　理学療法学科講師）	呼吸障害を伴う重症児の健康に関する研究
	若林　尚樹 （デザイン学部教授）	水族館におけるワークショップデザインのための設計要件と評価手法の研究
	松村　誠一郎 （デザイン学部准教授）	インタラクティブアート作品の展示における定量評価
若手研究（B）	宇田　隆哉 （コンピュータサイエンス学部講師）	人間の心理特性と振る舞いを利用した弱者のための携帯端末向けセキュリティ技術の研究
	柴田　千尋 （コンピュータサイエンス学部助教）	Distributional 学習に対するノンパラメトリックベイズの適用と応用
	渡邊　紀文 （コンピュータサイエンス学部助教）	すれ違い時の歩行文節化モデルに基づいたパーソナルモビリティ搭乗者の安全な行動誘導
	松橋　崇史 （メディア学部助教）	選手雇用地域分散型トップスポーツクラブにおける選手雇用促進の課題と方策
	大久保　友雅 （工学部　機械工学科講師）	太陽励起レーザーのための高率的な太陽光キャビティの開発
	阿部　玲子 （医療保健学部　看護学科助教）	介護者会に参加する息子介護者への効果的かつ持続的な看護支援方法
	地神　裕史 （医療保健学部　理学療法学科講師）	骨粗鬆症を予防・改善させるノルディックウォーキング実施方法の開発と介入効果の検証
	楠本　泰士 （医療保健学部　理学療法学科助教）	痙直型脳性麻痺児におけるトレーニング種目別効果と下肢随意性との関係
	富沢　真也 （教養学環准教授）	非軸対称摂動に対するブラックホールの安定性解析
	加用　一者 （教養学環講師）	宇宙大規模構造・重力レンズ現象を用いた、重力理論の検証と構造形成初期条件への制限
研究活動スタート支援	三上　あかね （医療保健学部　臨床検査学科講師）	糖化関連疾病機構解析に向けた細胞内活性炭素種由来糖化経路モニタリング技術の開発
	奥橋　佑基 （医療保健学部　臨床検査学科助教）	白血病細胞の増殖を制御するシグナル分子機構の解明

3．受託研究

研究者名	研究テーマ	期間	企業（団体）名
山本　順寛 （応用生物学部教授）	厚生労働科学研究委託事業（難治性疾患等克服研究事業）「多系統委縮症の治療法開発研究」	H26.6.2 ～ H27.3.31	国立大学法人東京大学
三田地　成幸 （コンピュータサイエンス学部教授）	F-SMS システムへの石英系光ファイバの適用可能性研究	H27.2.16 ～ H28.2.15	住友電気工業株式会社
山下　俊 （工学部　応用化学科教授）	物流情報システムの連携ー海上コンテナの国際高品質異業種混載事業に関する RFID ミドルウェア設計開発業務	H26.12.2 ～ H27.3.6	東芝ロジスティクス株式会社
伊藤　雅仁 （コンピュータサイエンス学部講師）	液晶ポリマーの分子間相互作用に関する研究	H27.4.1 ～ H28.3.31	ポリプラスチックス株式会社

他 3 件

4．共同研究

研究者名	研究テーマ	期間	企業（団体）名
杉山　友康 （応用生物学部教授）	コンクリートの６価クロム制御方法に関する研究	H27.4.1 ～ H29.3.31	初野建材工業株式会社
正木　仁 （応用生物学部教授）	化粧品の有用性評価法の開発および素材探索	H27.6.1 ～ H28.5.31	株式会社セプテム総研
高野　康雄 （医療保健学部　臨床工学科教授）	子宮癌肉腫のβ－カテニン／上皮間葉転換（EMT）によるがん・肉腫幹細胞化誘導機構の分子メカニズム：病理組織での可視化とその臨床応用	H27.6.1 ～ H28.3.31	学校法人北里研究所

他２件

5．奨学寄附金

研究者名	企業（団体）名
岩渕　徳郎（応用生物学部教授）	一般財団法人ホーユー科学財団
前田　憲寿（応用生物学部教授）	株式会社 ADEKA、理研ビタミン株式会社、株式会社モルトベーネ
正木　仁（応用生物学部教授）	株式会社アイビー化粧品、自然株式会社
山本　順寛（応用生物学部教授）	ムサシノ製薬株式会社、協和発酵バイオ株式会社
本間　太郎（応用生物学部助教）	公益信託　家政学研究助成基金
吉田　亘（応用生物学部助教）	公益財団法人中谷医工計測技術振興財団
古井　光明（工学部　機械工学科教授）	公益財団法人軽金属奨学会
西尾　和之（工学部　応用化学科教授）	公益財団法人軽金属奨学金
森本　樹（工学部　応用化学科講師）	公益財団法人松籟科学技術振興財団、公益財団法人八洲環境技術振興財団

他６件

６．その他

研究者名	研究テーマ	期間	企業（団体）名
吉田　亘 （応用生物学部助教）	学術研究振興資金（若手研究者奨励金）「DNA メチル化反応を触媒する機能性核酸の同定」	ー	日本私立学校振興・共済事業団
原　賢二 （工学部　応用化学科准教授）	戦略的創造研究推進事業（先導的物質変換領域）「金属錯体の高密度集積化と変更活性化機構の開発」	H27.4.1 ～ H28.3.31	国立研究開発法人 科学技術振興機構
横田　恭子 （医療保健学部　臨床検査学科教授）	感染症実用化研究事業（エイズ対策実用化研究事業）「HIV 感染症治癒を目指した iPS 細胞由来 T 細胞による新規免疫細胞療法に関する研究」	H27.4.1 ～ H28.3.31	国立研究開発法人 日本医療研究開発機構

大学事務局便り

１．学内合同企業セミナーが開催されました

平成 27 年 3 月 10 日（火）～ 12 日（木）の 3 日間、八王子キャンパス厚生棟において約 370 社の企業採用担当者をお招きして、学部 3 年生（八王子・蒲田）および大学院修士 1 年生対象の学内合同企業セミナーを開催し、延べ約 2,000 名の学生が参加しました。

当日は企業採用担当者が着席し、希望する企業ブースを学生が順次訪問する形式で行われました。3 時間という限られた時間でしたが、学生たちは会社概要や今後のエントリー等について真剣な眼差しで聴講していました。

今年度は就職スケジュールの後ろ倒しに伴い、これまで 12 月と 2 月に開催していた本セミナーを初めて 3 月に開催しましたが、企業の採用意欲は昨年にも増して旺盛で、最終的に約 500 社から参加の申し込みをいただきました。やむを得ず 3 月に参加いただけなかった企業様につきましては、5 月下旬から 6 月上旬にかけて同セミナーを別途開催しました。

２．就職活動スケジュールの変更に伴う学生の動き・傾向

就職スケジュールの後ろ倒しに伴い、企業の採用広報活動および会社説明会開始が 3 月に、採用試験開始が 8 月に変更となりました。今年はその元年ということで企業の動きが不透明でしたが、以前からガイダンス等で学生に周知していた通り、早期から採用試験を実施する企業が多く見られ、複数の内定を取得した学生も散見されます。

ただし、就職希望であるにも関わらず、いまだに就職活動に身が入らず、求人企業が多数存在するこの時期を自ら逃してしまう学生に、いち早く就職戦線に加わってもらうよう大学としてサポートしていくことが今後の大きな課題となっています。

３．平成２７年度スポーツ大会

平成 27 年 5 月 27 日（土）晴天の中、総合グラウンドや体育館を持つ八王子キャンパスにおいて、平成 27 年度スポーツ大会が盛大に開催されました。

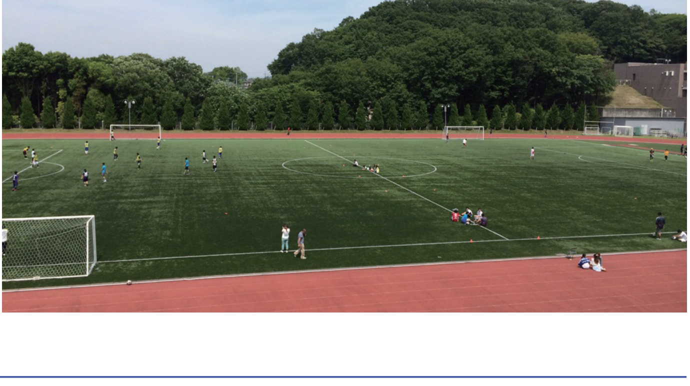
スポーツ大会は、課外活動団体にて構成された八王子キャンパス体育会が中心となって企画され、競技の運営やエントリーシステム、告知ポスターの作成等、八王子・蒲田両キャンパスのサークルが運営を行う、学生主体のイベントです。

競技はサッカーやテニス、バレー、バスケットなど 6 種目。八王子・蒲田の両キャンパスを合わせて、全 101 チームがエントリーし、493 名の参加となりました。

中でもバレーボールは、打倒八王子！と蒲田キャンパスより 5 チームがエントリー。終わってみると、1 位から 3 位まで蒲田キャンパスが独占という快挙。まさに、チームワークの勝利と言った結果でした。

その他、競技の合間や、今回エントリーできなかった学生のため、体育館のボウリング場を開放。人気も高く、ゲーム開始から終了まで、プレイヤーが途切れることはありませんでした。

なお、成績は、八王子キャンパス優勝 4 競技、2 位 3 競技、3 位 2 競技、蒲田キャンパス、優勝 2 競技、2 位 3 競技、3 位 4 競技と言う結果でした。



1．平成 26 年度学部卒業者・大学院修了者数

学　部		人　数
応用生物・バイオニクス学部		254
コンピュータサイエンス学部		463
メディア学部		405
医療保健学部	看護学科	76
	臨床工学科	66
	理学療法学科	76
	作業療法学科	31
デザイン学部		149
学　部　計		**1520**
バイオ・情報メディア研究科		
バイオニクス専攻		31
コンピュータサイエンス専攻		33
メディアサイエンス専攻		15
アントレプレナー専攻		12
研　究　科　計		**91**
合　　計		**1611**

2．平成 26 年度就職状況

学　部		希望者	就職者	就職率	大学院
学　部					
応用生物学部		207	200	96.62%	34
コンピュータサイエンス学部		408	390	95.59%	36
メディア学部		367	339	92.37%	7
医療保健学部	看護学科	76	76	100.0%	0
	臨床工学科	64	63	98.44%	0
	理学療法学科	73	73	100.0%	0
	作業療法学科	27	27	100.0%	0
デザイン学部		123	114	92.68	2
学　部　計		**1345**	**1282**	**95.32%**	**79**
バイオ・情報メディア研究科					
バイオニクス専攻		26	25	96.15%	3
コンピュータサイエンス専攻		28	24	85.71%	1
メディアサイエンス専攻		10	8	80.00%	2
アントレプレナー専攻		3	3	100.0%	0
研　究　科　計		**67**	**60**	**89.55%**	**6**
合　　計		**1412**	**1342**	**95.04%**	**85**

3．博士学位授与

氏　名	学　位	論　文　名	指 導 教 員
ALHIBSHI AMANI HASAN A（アルヒブシ アマーニ ハサン エー） （バイオニクス専攻）	博士（工学）	Thymoquinone inhibits amyloid beta alpha-synuclein-induced neurotoxicities in rat primary neurons and human induced pluripotent stemcells-derived neurons	軽部　征夫　教授
福嶋　勇太 （バイオニクス専攻）	博士（工学）	針穿刺手技支援の医用工学的研究	苗村　潔　准教授
林　怡宏 （バイオニクス専攻）	博士（工学）	無機担体との複合化によるアントシアニン色素およびフィコエリスリン色素の安定化	柴田　雅史　教授
兼松　祥央 （メディアサイエンス専攻）	博士（メディアサイエンス）	映像分析に基づく演出設計支援手法の研究	近藤　邦雄　教授

4．平成 27 年度入学者数

学部学科名		AO 入試	推薦入試	一般入試	その他入試	小　計	編入学（2 年次）	編入学（3 年次）	合　計
学　部									
応用生物学部		36	66	172	2	276	15	15	306
コンピュータサイエンス学部		50	89	230	2	371	21	26	418
メディア学部		84	85	193	6	368	9	7	384
工学部	機械工学科	18	3	100	–	121	–	–	121
	電気電子工学科	12	0	130	–	142	–	–	142
	応用化学科	8	0	82	–	90	–	–	90
医療保健学部	看護学科	32	11	82	–	125	–	–	125
	臨床工学科	21	5	60	–	86	–	–	86
	理学療法学科	23	7	55	–	85	–	–	85
	作業療法学科	11	2	30	–	43	–	–	43
	臨床検査学科	19	7	53	–	79	–	–	79
デザイン学部		96	60	69	–	225	–	2	227
学部計		**410**	**335**	**1256**	**10**	**2011**	**45**	**50**	**2106**
バイオ・情報メディア研究科									
修士課程	バイオニクス専攻	–	14	20	–	34	–	–	34
	コンピュータサイエンス専攻	–	9	32	–	41	–	–	41
	メディアサイエンス専攻	–	4	10	–	14	–	–	14
	アントレプレナー専攻	–	1	10	–	11	–	–	11
博士後期課程	バイオニクス専攻	–	1	2	–	3	–	–	3
	コンピュータサイエンス専攻	–	0	1	–	1	–	–	1
	メディアサイエンス専攻	–	0	4	–	4	–	–	4
研究科計		–	**29**	**79**	–	**108**	–	–	**108**
合計		**410**	**364**	**1335**	**10**	**2119**	**45**	**50**	**2214**

その他

1．2016年入学者選抜　日程表

試験日	合格発表日	学部・学科	形態
6月28日（日）	7月3日（金）	応用生物学部 コンピュータサイエンス学部 メディア学部 工学部＊１ デザイン学部	・編入学指定校推薦（専門学校）
7月4日（土）	7月17日（金）	大学院全専攻	・学内推薦（修士課程及び博士後期課程） ・博士後期課程（秋入学）
9月5日（土）	9月11日（金）	大学院全専攻	・A日程（修士課程）
10月17日（土）	11月6日（金）	メディア学部 工学部	・AO入試
10月18日（日）		応用生物学部 コンピュータサイエンス学部	
10月24日（土）		デザイン学部	
11月7日（土）	11月20日（金）	医療保健学部　看護学科 医療保健学部　臨床検査学科	
11月8日（日）		医療保健学部　臨床工学科 医療保健学部　理学療法学科 医療保健学部　作業療法学科	
11月7日（土）		デザイン学部	・指定校推薦（高等学校・専門学校） ・外国人留学生特別推薦
		医療保健学部	・指定校推薦（専門学校） ・公募推薦 ・外国人留学生特別推薦
11月14日（土）		応用生物学部 コンピュータサイエンス学部 メディア学部 工学部	・指定校推薦（高等学校・専門学校） ・外国人留学生特別推薦＊２
11月15日（日）		応用生物学部 コンピュータサイエンス学部 メディア学部 工学部＊１	・編入学一般選抜 ・編入学指定校推薦（高等専門学校）＊３
予　定 11月15日（日）	予　定 11月20日（金）	応用生物学部 コンピュータサイエンス学部 メディア学部	予　定 ・編入学（MJHEP）＊４ ・編入学（外国人留学生推薦）
1月9日（土）	1月14日（木）	応用生物学部 コンピュータサイエンス学部 メディア学部	・外国人留学生試験 ・外国人留学生指定校推薦（附属日本語学校）
1月16日（土） 1月17日（日）	2月10日（水）	全学部	・センター利用試験前期 注：本学での個別学力試験は実施しない
1月29日（金） 1月30日（土） 1月31日（日） 2月1日（月）		全学部	・一般入試A日程
2月7日（日）	2月12日（金）	全専攻	・B日程（修士課程及び博士後期課程）
1月16日（土） 1月17日（日）	2月22日（月）	応用生物学部 コンピュータサイエンス学部 メディア学部 工学部	・センター利用試験後期 注：本学での個別学力試験は実施しない
2月23日（火）	3月4日（金）	全学部	・一般入試B日程

工学部＊１：工学部編入学は、２年次編入学試験のみ実施。
外国人留学生特別推薦＊２：実施学部は応用生物学部、コンピュータサイエンス学部、メディア学部。
編入学指定校推薦（高等専門学校）＊３：実施学部はコンピュータサイエンス学部、メディア学部。
編入学（MJHEP）＊４：実施学部は応用生物学部、コンピュータサイエンス学部。

2．平成２６年度決算

１）資金収支計算書

科目		金額（円）
収入の部	学生生徒等納付金収入	11,354,435,000
	手数料収入	251,177,873
	寄付金収入	34,606,154
	補助金収入	411,997,210
	資産運用収入	124,119,931
	資産売却収入	460,000,000
	事業収入	484,197,108
	雑収入	108,563,192
	前受金収入	3,148,849,700
	その他の収入	206,862,030
	資金収入調整勘定	△ 3,370,950,794
	前年度繰越支払資金	49,765,148,446
	収入の部合計	62,979,005,850
支出の部	人件費支出	4,278,252,469
	教育研究経費支出	2,057,032,721
	管理経費支出	1,533,744,083
	施設関係支出	777,974,291
	設備関係支出	316,136,498
	その他の支出	517,465,846
	資金支出調整勘定	△ 603,812,817
	次年度繰越支払資金	54,102,212,759
	支出の部合計	62,979,005,850

２）消費収支計算書

科目		金額（円）
消費収入の部	学生生徒等納付金	11,354,435,000
	手数料	251,177,873
	寄付金	90,307,643
	補助金	411,997,210
	資産運用収入	124,119,931
	事業収入	484,197,108
	雑収入	108,563,192
	帰属収入合計	12,824,797,957
	基本金組入額合計	△ 708,838,910
	消費収入の部合計	12,115,959,047
消費支出の部	人件費	4,396,689,834
	教育研究経費	3,464,318,312
	管理経費	1,851,800,884
	資産処分差額	5,077,882
	徴収不能引当金繰入額	△ 50,000
	徴収不能額	8,669,000
	消費支出の部合計	9,726,505,912
	当年度消費収入超過額	2,389,453,135
	前年度繰越消費収入超過額	6,260,273,047
	翌年度繰越消費収入超過額	8,649,726,182

3．平成２７年度予算

１）資金収支予算書

科目		金額（円）
収入の部	学生生徒等納付金収入	11,679,999,000
	手数料収入	313,308,000
	寄付金収入	34,000,000
	補助金収入	234,620,000
	資産売却収入	38,921,000
	付随事業・収益事業収入	482,756,000
	受取利息・配当金収入	21,556,000
	雑収入	148,592,000
	借入金等収入	0
	前受金収入	3,636,983,000
	その他の収入	122,841,044
	資金収入調整勘定	△ 3,148,849,700
	前年度繰越支払資金	54,102,212,759
	収入の部合計	67,666,939,103
支出の部	人件費支出	4,330,627,000
	教育研究経費支出	2,085,102,000
	管理経費支出	1,479,517,000
	借入金等利息支出	0
	借入金等返済支出	0
	施設関係支出	275,050,000
	設備関係支出	1,008,488,000
	資産運用支出	0
	その他の支出	547,623,449
	資金支出調整勘定	△ 484,628,595
	翌年度繰越支払資金	58,425,160,249
	支出の部合計	67,666,939,103

２）事業活動収支予算書

科目			金額（円）
教育活動収支	事業活動収入の部	学生生徒等納付金	11,679,999,000
		手数料	313,308,000
		寄付金	34,000,000
		経常費等補助金	234,620,000
		付随事業収入	482,756,000
		雑収入	148,592,000
		教育活動収入計	12,893,275,000
	事業活動支出の部	人件費	4,408,627,000
		教育研究経費	3,552,708,000
		管理経費	1,788,792,000
		徴収不能額等	0
		教育活動支出計	9,750,127,000
	教育活動収支差額		3,143,148,000
教育活動外収支	事業活動収入の部	受取利息・配当金	21,556,000
		その他の教育活動外収入	0
		教育活動外収入計	21,556,000
	事業活動支出の部	借入金等利息	0
		その他の教育活動外支出	0
		教育活動外支出計	0
	教育活動外収支差額		21,556,000
経常収支差額			3,164,704,000
特別収支	事業活動収入の部	資産売却差額	0
		その他の特別収入	0
		特別収入計	0
	事業活動支出の部	資産処分差額	0
		その他の特別支出	0
		特別支出計	0
	特別収支差額		0
基本金組入前当年度収支差額			3,164,704,000
基本金組入額合計			△ 1,283,538,000
当年度収支差額			1,881,166,000
前年度繰越収支差額			8,649,726,182
基本金取崩額			0
翌年度繰越収支差額			10,530,892,182
（参考）			
事業活動収入計			12,914,831,000
事業活動支出計			9,750,127,000

4．平成２７年度学内行事予定（７月～１２月）

★土曜日・祝日開講または振替授業実施日

八王子キャンパス

行事予定	日　付
前期末試験時間割発表	7 月上旬
★補講	7 月 11 日（土）
授業開講予定日 （自然災害等で休講となった場合の振替日）	7 月 18 日（土）
★祝日授業開講	7 月 20 日（月）
★振替授業	7 月 23 日（木）［月曜日授業］ 24 日（金）［火曜日授業］
授業終了	7 月 24 日（金）
前期末試験	7 月 25 日（土） ～ 8 月 3 日（月） ※最終日は予備日
夏期休業	8 月 4 日（火） ～ 9 月 17 日（木）
創立記念日（休業日） ※ 5 月 1 日から振替	8 月 8 日（土）
成績表（前期）交付	9 月中旬
就職関連行事（3 年生）	9 月 18 日（金）
★授業開始［祝日授業開講］	9 月 23 日（水）
履修登録	9 月 30 日（水） ～ 10 月 5 日（月）
履修登録確認・修正	10 月 6 日（火）
紅華祭（学園祭）	10 月 11 日（日） 12 日（月祝）［体育の日］
※紅華祭に伴う準備および後片付けのため、全学部・全学年の開講科目について、10 月 10 日（土）、13 日（火）を休講とする。	
秋期保護者懇談会	10 月 11 日（日）
★祝日授業開講	11 月 3 日（火）
★祝日授業開講	11 月 23 日（月）
AO 入試合格者入学前 準備ガイダンス	11 月 28 日（土）
指定校推薦入試合格者入学前 準備ガイダンス	12 月 13 日（日）
後期末試験時間割発表	12 月中旬
補講	12 月 19 日（土）
★振替授業	12 月 24 日（木）［月曜日授業］
冬期休業	12 月 25 日（金） ～ 1 月 4 日（月）

蒲田キャンパス

行事予定	日　付
前期末試験時間割発表	7 月 10 日（金）
★祝日授業開講	7 月 20 日（月）
補講	7 月 23 日（木）・24 日（金）
授業終了	7 月 28 日（火）
前期末試験	7 月 29 日（水） ～ 8 月 7 日（金）
創立記念日（休業日） ※ 5 月 1 日から振替	8 月 8 日（土）
成績〆切	8 月 17 日（月）
前期再試験（医療保健学部のみ）	8 月 25 日（火） ～ 8 月 28 日（金）
成績表（前期）交付	9 月中旬
授業開始	9 月 11 日（金）
★祝日授業開講	9 月 23 日（水）
医療保健学部卒業論文審査	10 月（予定）
★祝日授業開講	10 月 12 日（月）
秋期保護者懇談会	10 月 17 日（土）
かまた祭（学園祭）	10 月 31 日（土） 11 月 1 日（日）
※かまた祭に伴う準備および後片付けのため、全学部・全学年の開講科目について、10 月 30 日（金）、11 月 2 日（月）を休講とする。	
★祝日授業開講	11 月 3 日（火）
★祝日授業開講	11 月 23 日（月）
後期末試験時間割発表	12 月 11 日（金）
推薦入試合格者ガイダンス	12 月 20 日（日）
★月曜日振替授業	12 月 24 日（木）
冬期休業	12 月 25 日（金） ～ 1 月 4 日（月）

入学式によせて（学長式辞）

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。また、ご両親をはじめとするご家族の皆さん、関係者の方々にもお祝い申し上げます。

さて、東京工科大学は創立してから 29 年という大変若い大学ですが、建学の理念は昭和 22 年蒲田に片柳鴻理事長が設立された創美学園の理念を受け継いでいます。1986 年の開学以来、基本理念として「生活の質の向上と技術の発展に貢献する人材を育成する」を掲げています。この基本理念を実現するために 3 つの具体的理念を定めています。（1）実社会に役立つ専門の学理と技術の教育、（2）先端的研究を介した教育とその研究成果の社会還元、（3）理想的な教育と研究を行うための理想的な環境整備です。これらの理念は教室や実習室に掲げてあります。これらの理念を一言で「実学主義」と言っていますが、この理念に基づく教育の目的は、国際的な教養、実学を重視した専門能力、コミュニケーション能力、論理的な思考力、分析・評価能力、問題解決力であり、これらは本学が定めるラーニングアウトカム（学習の成果）となっています。現在は経済のグローバル化が進んでいますので、世界に通用する人材を育成し、産業界や社会に貢献したいと考えています。そのために東京工科大学は 3 つのポリシーを定めて、学生を募集し、教育・研究を行い、学位を授与しています。

本学の入学者受け入れの方針（アドミッションポリシー）は、（1）各専門分野の学修と研究に強い意欲を持って挑み、自己成長して自分の夢の実現を目指す人、（2）豊かな教養と人間性を育み、高い倫理性と創造性を持ち、持続可能な社会（サステイナブル社会）の実現に貢献するです。

次に本学の教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）について説明を致します。教養課程は、人文科学、社会科学や外国語等の 4 科目群から編成されていて、最終的には国際的な教養を身につけることができます。また、専門科目は、専門基礎・共通科目群と専門科目群からなり、各学部、学科の専門分野の知識、先端技術やスキルを学び、これらの知識や技術を総合的に活用して問題を解決したり、新しい価値の創造ができ、実践的な応用力を身につけることができます。学位授与の方針（ディプロマポリシー）は、各学部、学科に所定期間在学し、それぞれの学部や学科の教育理念や教育目標に沿って設定した科目等を履修し、学士の卒業試験に合格することが学位授与の要件です。このためには各学部、学科が共通で行う教養科目と専門科目等の修得と、コミュニケーション能力、論理的な思考力、分析・評価能力、問題解決力を身につけているかどうかが学士の卒業試験に合格する基準となります。

さて、東京工科大学は 29 年間で著しく進化してきました。私はバイオテクノロジーの専門家ですから生物の進化のイメージを大学の発展に重ね合わせてしまいますが、まさに産業界の人材ニーズを先取りする形で進化している大学と言えると思います。1986 年の創立の時は日本は未だ高度成長期にあり、産業界の要請で工学部を作りました。

次にマルチメディアと呼ばれましたが、新しいメディア時代の到来が予測され、この時代に必要な技術者を養成するためメディア学部を設立し、大成功しました。そこで、工学部を発展的に改組して、高度情報化社会に対応した高度な技術者を養成する目的でコンピュータサイエンス学部と、生命科学とバイオテクノロジーを応用したバイオインダストリーを支える技術者の教育を目的に応用生物学部を作りました。そして、平成 22 年には蒲田キャンパスに進出し、高度先進医療に対応できる人材育成のための医療保健学部と、実践的なデザインを通して社会に貢献する人材を育成する目的でデザイン学部を作りました。そして今年、21 世紀に不可欠なサステイナブルエンジニアリングの発想を身につけた新しい工学技術者の教育を行う工学部を設立致しました。こうして 29 年間に 6 学部と教養学環を持つ理工系総合大学に発展しました。

さて、皆様が大学で学ぶ目的は 3 つあります。第 1 はすでに述べた、社会人になるための教養を身につけることです。現在、わが国の産業はどんどん海外に進出しており、経済のグローバル化が急速に進んでいますので、卒業後は海外の企業で働く機会が増えています。国際経済や国際政治、文化や宗教、語学などの国際的な教養は不可欠になっています。特に英語によるコミュニケーション能力が益々必要になっています。TOEIC（Test of English for International Communication のことで英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界共通のテスト）のスコア 600 点以上を就職の条件として要求する企業が増えています。また、これらの教養教育によって社会人としての基礎力が身につき、高い倫理性、創造性と豊かな人間性を育むことができます。

ここにいる大部分の学生諸君は普通高校を卒業されていると思いますが、第 2 の目的は専門と言われる特定の分野の知識、技術やスキルを身につけることです。卒業後はこの専門を生かして仕事や生活をしていくことになります。しかし、学修した専門の知識や技術、スキルで一生仕事をしていけるかどうかはわかりません。実際に 10 ～ 20 年経つと、コンピュータ（人工知能）、ロボットやセンサー技術の発展によって消えてしまう職業が多く出ると予測されています。オックスフォード大学のマイケル A. オズボーン准教授は、702 の職種がこれからどれだけコンピュータ技術等によって自動化されて、職業が無くなっていくか予想しています。すなわち、コンピュータやロボットなどの発展によって産業が急速に変わっていくことを意味しています。しかも、世界経済は変化が激しい不透明な時代に突入しているのです。従って、社会や産業が著しく変化しても、これに柔軟に対応し、新たな分野を切り拓いていける能力が必要となっています。すなわち、生涯にわたっていろいろなことを学修しながら新しい時代、社会、科学技術に対応する必要があると思います。

第 3 は就職するための準備をすることです。自分の専門を生かせる企業を探します。本学は 1 年次からフレッシャーズ・ゼミ、2 年次から社会人基礎科目とキャリアデザインなどの科目が用意され、皆様が就職できるまで全教職員一丸となって皆様をサポートします。既に述べた色々な能力を身につけるために注目されているのがアクティブラーニングと呼ばれる教育方法です。解りやすく言えば学生中心の授業や実習、演習で、教員と学生が双方向で理解しているかどうかを確認しながら行う授業や実習、演習のことです。特に PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）と呼ばれる高度なアクティブラーニングはすでに述べたラーニングアウトカム（学習の成果）として本学が掲げている問題解決能力等を養うために有効で、1 年次の授業からこれを導入していますので、皆様もすぐ経験することになると思います。本学の片柳研究所の 10 階に、文部科学省から補助金をいただき、片柳理事長にアクティブ・ラーニングセンターを作っていただきました。ここを活用して PBL が行われています。大学では授業を受けるだけではなく、実習や演習をして覚える知識や技術・スキルが多いので、何事にも好奇心（興味）を持って臨んでもらい、必ず予習する事が大切です。最近は反転授業といって自宅でコンピュータや情報端末を利用して授業（ e ラーニング）を受け、大学に来てこの授業の内容について討論をしたり、宿題を発表したりする授業が教育効果を上げると注目されています。本学のコンピュータサイエンス学部では、JMOOC に加入し、このコンテンツを利用して反転授業を行い、成果を上げています。今後は本学の教員や学生が作ったコンテンツを積極的に発信したいと思っています。大学に入学したら学ばなければならないことが多くありますので、時間を上手に使う習慣を身につけて下さい。全ての人に一日２４時間が与えられていますが、これを計画的に使うかどうかで人生が大きく変わってきます。東京大学の名誉教授で科学雑誌の「ニュートン」の編集長を長く務めていた竹内均先生は、15 分間活用法を提案していました。15 分という時間はいくら忙しい人でも作ることができます。実際に私も大いに活用しています。これを活用する習慣を身につけると、時間の有効利用のエキスパートになれます。授業の予習、復習、サークル活動など、勉学と学生生活の時間をマネージメントすることによって、これからの４年間で皆様はそれぞれ見違えるように成長すると思います。そして卒業するときにはこの大学で学んだことが誇りに思えることを期待しています。

皆様がそれぞれ目標に向かってこれから４年間、本学で色々なことに挑戦されることを期待して、式辞と致します。本日は入学おめでとうございます。

平成 27 年 4 月 3 日

東京工科大学　学長　軽部征夫

―編集後記―

平成10年から制作が始まった東京工科大学報も17年目に入り、気がつけば第62号を発行することができました。平成10年頃といえば、八王子キャンパスに1学部4学科のみだった大学が、今や2つのキャンパスに6学部12学科を擁する大学へ発展したことを考えると、学報の発行号数と併せて時間の流れを感じられます。62号を迎えた学報ですが、掲載されている内容は刊行当初よりほぼ変わっておらず、常に大学としてステークホルダーの皆様に対して学内の情報を発信するということを踏まえた記事作りをしています。

学報とは、「大学の広報誌」という意味合いが一般的です。学生募集に使われる大学案内や公式ホームページでは伝えきれない、学内にまだまだ眠っている学生や教員の様々な活動をより多くの方に知ってもらい、東京工科大学のファンを増やしていけるような学報を作り続けていきたいと考えています。

次号発行は、1月頃を予定しております。学園祭での学生達のイキイキとした様子を掲載する予定です。ぜひご覧いただければと思います。

東京工科大学報

発行月 || 平成27年7月
発　行 || 東京工科大学
編　集 || 大学事務局業務課

東京工科大学
TOKYO UNIVERSITY OF TECHNOLOGY

■蒲田キャンパス　〒144-8535　東京都大田区西蒲田5-23-22　☎03-6424-2111
■八王子キャンパス　〒192-0982　東京都八王子市片倉町1404-1　☎042-637-2111
WEB：http://www.teu.ac.jp/　Mail：jm-kmgyoumu@stf.teu.ac.jp